

【徒然草】

【】（神無月のころ）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ることはべりしに、はるかなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたるいほりあり。木の葉にうつもるるかけひのしづくならでは、つゆおとなふものなし。關伽柵あかだな「」など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。

かくてもあられるよ、とあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるがまはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかば、と覚えしか。

（徒然草）

問一 「」に入る言葉として最も適当なものを次の中から選べ。

ア 松・山吹 イ 桜・竹 ウ 桃・南天 エ 梅・柳 オ 菊・紅葉

問二 回りをきびしく囲った柑子の木を見て、作者は主人（住む人）に対してどんな気持ちを持ったのか、二十五字程度で書け。

問三 「徒然草」を含む四つの作品が、古い順に上から正しく並べられているものを次の中から選べ。

ア 「万葉集」 ・ 「枕草子」 ・ 「徒然草」 ・ 「おくのほそ道」

イ 「万葉集」 ・ 「おくのほそ道」 ・ 「枕草子」 ・ 「徒然草」

ウ 「万葉集」 ・ 「徒然草」 ・ 「おくのほそ道」 ・ 「枕草子」

エ 「万葉集」 ・ 「枕草子」 ・ 「おくのほそ道」 ・ 「徒然草」

オ 「万葉集」 ・ 「徒然草」 ・ 「枕草子」 ・ 「おくのほそ道」

(福島県)

「解答」

問一 オ

問二 柑子の実をとられまいとする狭い心に失望する気持ち

問三 ア

【】(ある人、弓射る事を習ふに)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある人、弓射る事を習ふに、諸矢をたばさみて的に向かふ。師のいはく、初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、始めの矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へといふ。わずかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ、万事にわたるべし。

(徒然草)

問一 次の言葉を現代仮名づかいで書け。

習ふ(習) ( ) なほざり( ) ( )

問二 本文中に、師の言葉がある。その言葉の初めと終わりの二字を、それぞれ抜き出して書け。

初め( ) ( ) 終わり( ) ( )

問三 「得失なく」の意味として適切なものを、次のア～エから選んで、記号で答えよ。

ア 心の平静を失わないで

イ ほめられようなどとは思わないで

ウ 当たり、はずれを考えないで

エ 怠け心を起こさないで

問四 「おろそかにせんと思はんや。」の意味を考えて、次の言葉に続けて、空欄に書き入れ、文を完成せよ。

わずかに二本しかない矢、師が見ている前で、その一本を( ) ( )

問五 弓を射るときに必要な心構えを、すべてに通じる心構えになるように言い直して、次の空欄の中の言葉に続けて書け。  
(なごごと)

(兵庫)

「解答」

問一 う、なおざり

問二 初め：初心 終わり：思入

問三 ウ

問四 粗末にしようなどとは思わない。

問五 においても、初めから心をこめて取り組まねばならない。

【】(園の別当入道は)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

園そのの別当入道たうは、さつなき庖丁ほうちょう者ものなり。ある人のもとにて、いみじき鯉こいを出いだしたりければ、皆人、別当入道の庖丁を見ればやと思へども、たやすくうち出でんもいかがとためらひけるを別当入道さる人にて、「この程ほど百日ひゃくにちの鯉をきり侍るを、今日欠き侍るべきにあらず、枉まげて申し請うげん」とてきられける、いみじくつきつしく、興ありて人ども思へりけると、或人、北山きたやま太政入道殿にかたり申されたりければ、「(a) かやうの事、己おのれはよにづるさく覚ゆるなり。『切りぬべき人なくば、給たまべ。切らん』と言ひたらんは、なほ(b)よかりなん、何な祭まつり、百日の鯉を切らんぞ」とのたまひたりし、をかしく覚えしと人の語り給たまひける、いとをかし。

(徒然草)

問一 (a)「かやうの事」とは、具体的にどのようなことか。最も適当なものを次のア～エから一つ選べ。

ア 別当入道の庖丁さばきを見たいが、言い出すのをためらったこと

イ 鯉を料理するのに、一日でも欠かせないと理由をつけて料理したこと

ウ 料理の名人のすばらしい庖丁さばきを、ぜひ見たいものだと思ったこと

エ 理由づけをして料理したのが、その場にふさわしいと思ったこと

問二 (b)「よかりなん」の現代語訳として、最も適当なものはどれか。次のア～エから一つ選べ。

ア よいとは限らないだろう      イ よくないに違いない

ウ よくないだろう      エ よいに違いない

問三 筆者の述べようとしたのはどういふことか。最も適当なものを次のア～エから一つ選べ。

ア 物事には、率直に対応するのが自然である。

イ 物事には、楽しそうに対応するのが和やかだ。

ウ 物事には、遠慮がちに対応するのが奥ゆかしい。

エ 物事には、一くふうして対応するのがおもしろい。

(京都)

「解答」

問一 イ

問二 エ

問三 ア

【】(さしたることなくて)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(a) さしたることなくて、人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、帰るべし。久しくゐたる、いとむつかし。

(徒然草)

問一 この文章は何について述べたものか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 人を訪ねるときの心構え      イ 人と話をするときの心構え

ウ 人と旅をするときの心構え      エ 人にものを頼むときの心構え

問二 (a) 「さしたること」の意味として、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 何かうれしいこと      イ とてもつまらないこと

ウ これといつほどのこと      エ 人に頼まれたこと

問三 (b) 「そのこと」とあるが、どういつことを指しているか。それを表す最も適当な言葉を、文章中からさがして抜き出せ。

問四 (c) 「とく」の意味を書け。

(埼玉)

「解答」

問一 ア

問二 ウ

問三 用

問四 早く

【】(吉田と申す馬乗の)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

吉田と申す馬乗の申しはべりしは、「馬」とに「はきものなり、人の力争ふべからずと知るべし。乗るべき馬をばまじよくみて、強き所弱き所を知るべし。次に轡、鞍の具に 危ふき事やあると見て心にかかる事あらば、その馬を馳すべからず。この用意を忘れざるを馬乗とは申すなり。これ秘蔵の事なり。」と申しき。

(徒然草)

問一 「危ふき事やある」の口語訳として、最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 危険なことがあるはしないか

イ 危険があるにちがいない

ウ 危険なめにあうのはさげたい

エ 危険な状態になりそうだ

問二 筆者は、「吉田と申す馬乗」の言葉の、どのような点に共感したのか。次のア～エから最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 名人には名人なりのえりこみがあるという点。

イ 専門家ほどその道に対して慎重であるという点。

ウ 名人でもときには迷いをもつものであるという点。

エ 専門家は人の意見を素直に取り入れるという点。

問三 右の文章で言おうとしている趣旨に最も近い」「ことわざ」を、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 雨降って地かたまる  
イ 火のない所に煙は立たぬ  
ウ 石橋をたたいて渡る  
エ 上手の手から水がもれる

(大分)

「解答」

問一 ア

問二 イ

問三 ウ

【】(法顯三蔵の)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

法顯三蔵の、天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲しび、病に臥し(漢の食を願ひ給ひけることを聞きて、「さばかりの) a (人の、むげにこそ心弱き気色を、(b)人の国にて見え給ひけれ」と人の言ひしに弘融僧都、優に情ありける三蔵かなと言ひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくく覚えしか。

(徒然草)

問一 ( ) ( ) には、ひらがな二字が入る。文脈を考えて適切なものを、文章中から抜き出して答えよ。

問二 (a)の「人」はだれか。また、(b)の「人の国」とはどこか。それぞれ文章中の語で答えよ。

問三 右の文章には、他にもつゝか所、「」でくくらなければならないところがある。その部分を抜き出して答えよ。

問四 作者は、どのようなことについて、「心にくく」思ったのか。次のア～エから選べ。

ア 人間味のある弘融僧都に感心した法師たちの態度について。

イ 人間味のある法顯三蔵を賞賛した弘融僧都の態度について。

ウ 人間味のある法顯三蔵に感心した法師でない人たちの態度について。

エ 人間味のある弘融僧都を賞賛した法顯三蔵の態度について。

(奈良)

「解答」

問一 ては

問二 (a) 法顯三蔵 (b) 天竺二

問三 優に情けありける三蔵かな

問四 イ

【】(よるづのこゝは)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

よるづのことは、月見るに「**」**、慰むものなれ。ある人の月ばかり面白きものはあらじと言ひしに、またひとり露こそあはれなれと争ひしこそ、をかしけれ。折りにふれば、何かはあはれならざらん。

(徒然草)

問一 「よるづの」を口語に言い換えて書け。

問二 「**」**に入る平仮名二字の言葉を文章中から抜き出せ。

問三 文章中には筆者以外の二人が論争している内容が含まれている。

(A)二人の発言の部分を、それぞれ文中のまま抜き出せ。

(B)二人の主張に対して、筆者はどのような考えを述べているか。最も適当なものを次から選べ。

ア 月を見ていると心が慰められるので、月がよい。

イ 露のほうが美しく、すばらしいものだと思う。

ウ 両者ともよい意見で、どちらが正しいかよく分からない。

エ よい時期のものに接すれば、どのようなものでも趣深い。

(奈良県)

「解答」

問一 すべての

問二 コネ

問三 (A) 月ばかり面白きものはあざじ・露こそめはれなれ (B) エ

【】(公世の二位の兄)

これは、「徒然草」の中の良覚僧正という位の高い僧の話です。文章を読んで、後の問いに答えよ。

公世の二位の兄、良覚僧正と聞えしは、きはめて 腹の悪しき人なりけり。

坊のかたはらに大きな榎の木がありければ、人、榎の木を僧正とぞ言ひける。このなしかるべからずとて、かの木を伐られにけり。その株のありければ、切杭の僧正と呼びけり。いよいよ腹を立ちて、切杭を掘り捨てたりける跡、大きな堀にてありければ、堀池の僧正とぞ言ひける。

(徒然草)

問一 「腹の悪しき人」とはどのような人か。最も適当なものを次の中から選べ。

ア 怒りっぽい人                   イ 意地の悪い人

ウ 悪だくみをする人               エ 落ち着きのない人

問二 文章中に、良覚僧正の心の中のつぶやきとして一箇所「」をつけるとしたらどこが最も適当か。その部分を十字以内で抜き出せ。

問三 この話のおもしろさはどこにあるのか。最も適当なものを次の中から選べ。

ア 良覚僧正が、切り株を掘って大きな堀をつくったこと。

イ 良覚僧正が、次々につけられるあだ名にむきになったこと。

ウ 良覚僧正が、次から次へと新しいあだ名をほしがったこと。

エ 良覚僧正が、人々のしつこさに負けて降参してしまったこと。

(北海道)

「解答」

問一 ア

問二 この名じかるへからず

問三 イ

【】(雪のおもしろう降りたりし朝)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

雪のおもしろう降りたりし(趣深く降り積もった)朝、人のがり(ある人のもとに)言ふべきことありて文(手紙)をやるとて、雪の「と何とも言はざりし返り事に(何も書かなかった私筆者)の手紙に対する返事に、』『この雪いかが見る。』と、「一筆のたまはせぬ(一言もおっしゃらない)ほどの ひがひがしからん人(趣のあるさまがわからないような人の仰せらるること、聞き入るべきかは)どうして聞き入れることができましようか。かへすがへす口惜しき(残念な)御心なり。」と言ひたりし(書いてあったこと)こそ、をかしかりしか(おもしろくて心ひかれること)だった。

今は亡き人なれば、かばかりのこと(これくらいのこと)としたりしたことも忘れがたし。

( ) 「徒然草」(兼好法師)による。( )

問一、かへすがへすを現代仮名遣いに改め、すべて平仮名で書きなさい。

問二、ひがひがしからん人とあるが、返事の送り主が、筆者のことを「ひがひがしからん人」と思ったのはなぜか。

現代語で三十字以内でまとめて書きなさい。ただし「筆者が」という書き出しで「〜から」「に続くようにする」と。

問三、をかしかりしかとあるが、筆者は、返事の送り主のどのようなたとへに「かしかりしか」と感じたのか。最も適切なものを、ア〜エから選び、符号で書きなさい。

ア、趣のあるさまを見落としていたことを許す返事を、すぐに送ってくるような、寛容なところ。

イ、頼んだ用件にこたえられないことをわびる返事を、わざわざ送ってくるような、正直なところ。

ウ、頼んだ用件に何とかこたえようとする返事を、すぐに送ってくるような、やさしいところ。

エ、趣のあるさまを理解しないことをとがめる返事を、わざわざ送ってくるような、率直なところ。

( ) 岐阜県 ( )

「解答」

問一 かえすがえす

問二 筆者が趣深く降りつもった雪のことを何も書いてこなかったから

問三 工

【枕草子】

【】(うつくしきもの)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

うつくしきもの。瓜にかきたるちこの顔。雀の子の、鼠鳴きするにをとり来る。二二三つばかりなるちこの、いそぎて這ひ来る道、いとちひさき塵のあじけるを、目もとに見つけて、いとをかしげなる指に、とら入て大人などに見せたる、いとうつくし。頭は尼剃ぎなるちこの、目に髪のおほ入るをかきはらやで、うちかたぶきて物など、見たるも、うつくし。

(枕草子)

問一 「とら入て」を現代仮名遣いに改めよ。

問二 「見たる」の主語として最も適当なものを次の中から選べ。

ア 頭 イ ちウ 目 エ 物

問三 作者が「うつくしきもの」として考えているものは、どのような共通性をもっているか。最も適当なものを次の中から選べ。

ア 小さくて弱々しいもの

イ 小さくて美しいもの

ウ 小さくてかわいらしいもの

エ 小さくて頼りないもの

問四 この文章は『枕草子』百五十一段の一部であるが、この作品が作られた時代はいつか。最も適当なものを次の中から選べ。

ア 奈良時代 イ 平安時代 ウ 鎌倉時代 エ 江戸時代

(沖縄県)

「解答」

問一 とおえて

問二 イ

問三 ウ

問四 イ

【】(秋は夕暮れ)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝やうるへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

(枕草子)

問一 〃の〃の〃のうち、意味用法が違うものを一つ選べ。

問二 音便が使われている言葉を文章中から二つ抜き出せ。

問三 鳥と雁の飛ぶ姿に寄せる筆者の心情が最もよく表れている文節を一つずつ探し、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めて書け。

問四 「はたいふべきにあらず」の解釈として最も適当なものを次の中から選べ。

ア また、だれにも言ってはならない。

イ また、言いようもないくらい趣が深い。

ウ また、これと言つほどの趣はない。

問五 「枕草子」と並ぶ代表的な随筆文学といわれているものを次の中から選べ。

ア 万葉集   イ 平家物語   ウ 徒然草   エ 奥の細道

(徳島県)

「解答」

問一

問二 近う、まいて

問三 烏：あわれなり、雁：おかし

問四 イ

問五 ウ

【】(池あるところの五月長雨のころ)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

池あるところの五月長雨のころいとあはれなれ。菖蒲・菰など生ひこりて、水もみどりなるに、庭もひとつ色に見えわたりて、くもりたる空をつくづくとながめくらしたるは、いみじうこそあはれなれ。いつも、すべて、(a)池あるところはあはれにをかし。冬も、氷したるあしたなどは(b)いふへきにもあらず。わざと(c)つくろひたるよりも、うち捨てて水草がちに荒れ、青みたる絶え間絶え間より、月かげばかりは白白と映りて見えたるなどよ。

すべて、月かげは、いかなるところにても( )。( )。

(枕草子)

問一 文章中から抜き出した次のうち、歴史的仮名づかいを含んでいないものはどれか。次のア～エから選べ。

ア いみじうこそあはれなれ

イ ひとついろにみえわたりて

ウ こほりしたるあしたなどは

エ あをみたるたえまたえまより

問二 (a)「池ある」を口語文に直すとき、「池」の下に補う語はどれか。次のア～エから選べ。

アの イで ウに エばかり

問三 (b) 「いふべきにもあらず。」の意味として、最も適当なものはどれか。次のア～エから選べ。  
ア いまさら言わないほうがよい。  
イ あらためて言わねばならない。  
ウ ことさらに言うにおよばない。  
エ 軽々しく言ってはならない。

問四 (c) 「つくろひたる」の意味として、最も適当なものはどれか。次のア～エから選べ。  
ア 作り替えた      イ その場のがれに隠した  
ウ 刈り取った      エ 手入れをした

問五 ( ) に「しみじみとした情趣がある」の意味にあたる古語を入れる場合、最も適当なものはどれか。次のア～エから選べ。

ア あはれなり      イ あはれなる  
ウ あはれなれ      エ あはれなし

問六 原文で筆者が述べていない情景を、次のア～エから選べ。  
ア 氷のはった朝のようす。  
イ 月の光が池に映っているようす。  
ウ 藻で池一面が緑になっているようす。  
エ 梅雨のころの、池やそのあたりのようす

(京都)

問一 「解答」  
問二 イ  
問三 ア  
問四 ウ  
問五 エ  
問六 ア  
ウ

【】(五月ばかりなどに)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいとあをく見えわたりたるに、上はつれなくて草生おひ茂りたるを、ながながと たださまに行けば、下はえならざりける水の、ふかくはあらねど、人などのあゆむにはしりあがりたる、「」。」。左右にある垣にある、もの枝などの、車の屋形などにさし入るを、いそぎて とら入てをらんとするほどに、ふと過ぎてはづれたるこそ、いとくちをしけれ。

蓬よもぎの車くるまに押しひしがれたりけるが、輪わの廻りたるに、 近ちかづちかかりたるもをかし。  
(枕草子)

問一 「」に入る五字の言葉を文章中から抜き出せ。

問二 「たださまに行けば」は、A 確定条件、B 仮定条件のどちらか、記号で答えよ。

問三 「とら入てをらん」を現代仮名遣いに改めて、平仮名で書け。

問四 「いとくちをしけれ」とは、作者が何に対してどのように思っているのか。最も適当なものを次の中から選べ。

A 木の枝を折りとって楽しもうとしたが、枝をとることに失敗して残念に思っている。

I 木の枝をとり過ぎて手から落としてしまい、欲張ってはいけなさと反省している。

ウ せっかく折りとった木の枝をふと手からとり落としてしまい、悔しく思っている。

エ 木の枝をとり集めようとしたが通りすがりの人はだれも手伝ってくれず、不愉快に思っている。

問五 「押しひしがれたりけるが」の主語を、次の中から選べ。

- ア 水    イ もの枝    ウ 蓬    エ 車

問六 「近づ」は、「近く」という言葉が変化したものであるがこのような変化を何というか、漢字二字で答えよ。

問七 文章中に描かれている季節や筆者の様子を説明した文を次の中から選べ。

ア 春のころに、従者とともに牛車に乗り、気ままに山里に出歩いている。

イ 梅雨の時期に、徒歩の従者を連れて牛車に乗り、山里を散策している。

ウ 夏の盛りに、従者を連れずに牛車に乗り、気の向くままに山里を見物している。

エ 夏の終わりに、牛車を引きながら、従者とともに山里を歩き回っている。

問八 枕草子を説明した事項の組み合わせとして正しいものを、次の中から選べ。

ア 紫式部・平安時代・日記

イ 清少納言・鎌倉時代・日記

ウ 清少納言・平安時代・随筆

(京都府)

「解答」

問一 いとをかし

問二 A

問三 とらえておらん

問八  
ウ

問七  
イ

問六  
音便

問五  
ウ

問四  
ア

【】(四月のつばき)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

なごは、世になつ) b (心あるさまにをかし。花のなかより黄金の玉かと見えていみじつあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたる朝ぼらけの) c (桜におとらず。ほととぎすのよすがとをへ思へばにや、) a (なほさらばいふ入つもあらず。

(枕草子)

問一 問一 (a) 「四月のつばき、五月のつばき」とは、どのつばきにあたるか。次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 仲春から晩春に移ってゆくころ
- イ 晩春から初夏に移ってゆくころ
- ウ 初夏から盛夏に移ってゆくころ
- エ 盛夏から晩夏に移ってゆくころ

問二 問二 (b) 「心ある」の意味として最もよいものを、次のア～エから選べ。

- ア 風情がある
- イ 人情が深い
- ウ 道理がわかる
- エ 誠意がある

問三 問三 (c) 「桜におとらず。」の解釈として最も適当なものを、次のア～エから選べ。

- ア 桜よりもはるかにすばらしい。
- イ 桜と同じくらいすばらしい。
- ウ 桜のほつがいつそすばらしい
- エ 桜にとてもおほはなす。

問四 (a) 「おぼろげな印象をあたえる」「あやふやな印象をあたえる」「あやふやな印象をあたえる」などがあるが、言いたいことがよくわからない印象をあたえるのかわりに、その気持ちを表すのにあやふやな印象をあたえるという形容詞を、文章中から抜き出せ。

(口E)

「解答」

問一 ウ

問二 ア

問三 イ

問四 をかし

【】(八月ばかりに)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

A 八月ばかりに、あめにまじりて吹きたる風、いと あはれなり。雨の脚横さまにさわがしう吹きたるに、夏とほしたる綿衣のかりたるを、生絹の単衣がさなて着たるも、いとをかし。この生絹だにいと所せく暑かはしく、とり捨てまほしかりしに、いつのほどにかくなりぬるにか、と思ふもをかし。暁に格子・妻戸をおしあげたれば、嵐の さと顔にしみたるこそ、いみじくをかしけれ。

B 九月つこもり、十月のころ、空(a)うち曇りて風のいと(b)さわがしく吹きて、黄なる葉ども(c)ほろほろとこぼれ落つる。(d)いとあはれなり。桜の葉、棕の葉こそ、いととくは落つれ。

C 十月ばかりに、木立おほかる所の庭は、いとめでたし。

(枕草子)

問一 「あはれなり」と対比され、「枕草子」を代表する言葉を文章中から抜き出し、現代仮名遣いに直して三文字で答えよ。

問二 「さと」「は」「ちつと」「ちつと」の意味で、様子を表す言葉である。「これと同じような動きをする言葉を(a)」「うち」「こぼれ」「わがしく」「ほろほろと」「さと」「ちつと」の中から選べ。

問三 「十月ばかりに、木立おほかる所の庭は、いとめでたし。」「について、なぜそのように言えるのか。B段落の内容も考えられて、その理由を選び出したものとして最も適当なものを後のア～エから選べ。

A 微妙な季節の移り変わりを、よりいっそう感じることができから。

B 色づいた葉の散り敷く庭や落ちゆくさまを、眺めることができるから。

C 風の音がなにもかもを忘れさせてくれ、心を軽やかにしてくれから。

D 暑かった夏がやっと終わって、涼しい風を肌を感じるから。

ア AとB イ AとC ウ BとD エ CとD

問四 原文を説明した次の文の( ) a・bに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを後から選べ。

作者は、風を中心とした季節の風物を、みずみずしい( ) a ( )と、日常の小さなできごとをも見逃さない知性豊かな( ) b ( )  
感覚によってとらえ、鮮やかに表現している。

ア a 芸術性 b 政治 イ a 感受性 b 生活

ウ a 神秘性 b 美的 エ a 叙情性 b 時代

(京都府)

「解答」

問一 おかし

問二 (C)

問三 ア

問四 イ

【】(春はあけぼの)

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝やうへへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにもあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつきつきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

( 『枕草子』より。 )

問一、傍線部「はたいふべきにあらず」を、現代かなづかいに改めて、すべてひらがなで書きなさい。

問二、「春はあけぼの」「夏は夜」「秋は夕暮れ」「冬はつとめて」の後に、同じ言葉を補つとすれば、どのような言葉が適切か、

本文中から最も適切な言葉を抜き出して書きなさい。また、その意味として適切なものをア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、みつともない　イ、かわいらしい　ウ、似つかわしい　エ、風情がある

問三、本文の特徴を説明したものとして、適切でないものを、ア～エから一つ選び記号で答えなさい。

ア、詳細な自然描写によって、無常観が描き出されている。

イ、視覚や聴覚でとらえた情景の描写の中に、季節感が凝縮されている。

ウ、情景描写は、自然だけでなく日常生活にも及んでいる。

エ、繊細なものやかすかなものが、鋭い観察眼でとらえられている。

問四、『枕草子』の作者名を書きなさい。また、この作品と同じ文の種類で、鎌倉時代に書かれた作品をア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、平家物語    イ、おくのほそ道    ウ、徒然草    エ、万葉集

(徳島県)

「解答」

問一 はたいつべきにあらず

問二 をかし・エ

問三 ア

問四 清少納言、ウ

【奥の細道】

【】(月日は百代の過客にして)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらいて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつつり、笠の緒付けかえて、三里に交すつるより、松島の月まつ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ難の家

表八句を庵の柱に懸け置く。(奥の細道)

問一 「過客」と同じ意味で使われている語を、文章中から抜き出せ。

問二 「古人も多く旅に死せるあり」は、古人に対する作者のどういう気持ちを表しているか。最も適当なものを次の中から選べ。

ア 恐怖    イ 同情    ウ 期待    エ 悲哀    オ 敬慕

問三 「取るもの手につかず」と最も意味の近い慣用句を次の中から選べ。

ア 手玉に取る    イ 途方に暮れる    ウ 手が回らない

エ 矢も盾もたまらない    オ はめを外す

- 問四 の句「草の戸も住み替はる代ぞ難の家」に詠まれている作者の気持ちとして最も適当なものを次の中から選べ。
- ア 風流な草庵も、俗っぽい家になったことだ。
- イ 古びた草庵も、新しい家に建てかえられたことだ。
- ウ わびしい草庵も、はなやいだ家になったことだ。
- エ 静かな草庵も、やかましい家になったことだ。

問五 「ぜひ旅に出たい」という作者の心の状態が最もよく現れてる部分を、文章中から四十字以内で抜き出し、初めと終わりの五文字を書け。

(鳥取県)

「解答」

問一 旅人

問二 オ

問三 エ

問四 ウ

問五 そぞろ神の〜手につかず

【】(弥生も末の七日)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

弥生も末の七日、明けぼの空朧々として、月は在明にて光をさまれる物から、不二の峰幽にみえて、上野谷中の花の梢又いつかはと心ぼそし。むつまじきがぎりは宵より じどひて、舟に乗て送る。千じゅと云所にて舟をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそく。

行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立ての初として、行道 なほすすまず。人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる迄はと見送へおくる《なるべし》。  
(奥の細道)

問一 「じどひて」・「なほ」を、現代仮名遣いに直しなさい。

問二 「舟に乗て送る」の主語を、原文中の言葉で書け。

(長野県)

「解答」

問一 じどひて なお

問二 むつまじきがぎりは

【】(三代の栄耀一睡のうちにして)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ、高館に(a)登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に(b)落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐとみえたり。さても義臣すべつてこの城に(c)もり、功名一時のくさむらとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と笠打ち敷きて、時のつづるまで(d)涙を落としはべりぬ。

(a) 夏草や兵どもが夢の跡  
(奥の細道)

問一 (a) 「登れば」の意味として適当なものを、次のア～エから選べ。

ア 登るうちに    イ 登るけれども    ウ 登るならば    エ 登ってみると

問二 (b) 「落ち入る。」の主語を一文節で答えよ。

問三 (c) 「涙を落としはべりぬ。」とあるが、涙を落とした理由は何か。最も適当なものを、次から選べ。

ア 永遠の自然に比べて人の世のはかなさを感じたから。

イ 時が経過して戦いの跡が消滅したのを嘆く気持ちから。

ウ 功名を争って戦った兵どもの勇氣に深く感動したから。

エ 人間の命の短さを季節の変化を通してよく知ったから。

問四 (d) (の句と同じ情景を述べている一文を、文章中から抜き出し、初めと終わりの三字で答えよ。

(群馬)

「解答」

問一 エ

問二 衣川

問三 ア

問四 初め…まてま

終わり…となる

【】(那須の黒羽といふ所に)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

那須の黒羽といふ所に知る人あれば、これより野越えにかかりて、直道を行かむとす。はるかに一村を見かけて行くに、雨降り日暮る。農夫の家に一夜を借りて、明くればまた野中に行く。そこに野飼ひの馬あり。草刈る男に嘆き寄れば、野夫といへどもさすがに情け知らぬにはあらず、

「いかがすべきや、されどもこの野は縦横に分かれて、うひうひしき旅人の道踏み違へむ、あやしうはべれば、この馬のとどまる所にて馬を返したまへ。」と貸しはべりぬ。小さき者二人、馬のあと慕ひて走る。一人は小姫にて名をかさねといふ。聞き慣れぬ名の優しかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし

曾良

やがて人里に至れば、価を鞍つばに結び付けて馬を返しぬ。

(奥の細道)

問一 「草刈る男に嘆き寄れば」とあるが、作者は何をお願いしたのか。最も適当なものを次の中から選べ。

ア 私の馬を休ませてほしい。

イ もう一晩宿を貸してほしい。

ウ 案内できる少女を探してほしい。

エ 馬をひいて案内してほしい。

オ しばらく雨宿りをさせてほしい。

問二 「あやしう」を現代仮名使いに改め、平仮名で書け。

問三 曾良の詠んだ「かさね」の句はどういう意味か。最も適当なものを次の中から選べ。  
ア かさねとは、少女の名前ではなく、八重撫子の名がふさわしいだろう。  
イ 名をかさねというからには、花にたとえたら八重撫子だろう。  
ウ 花びらの重なった撫子だから、八重撫子というのだろう。  
エ かさねとは、八重撫子の名ではなく、少女の名前であるべきだ。  
オ かさねとは、優雅な八重撫子の名であるにちがいない。

問四 「やがて」とはどういう意味か。最も適当なものを次の中から選べ。  
ア まもなく イ 無事に ウ そのまま  
エ 結局は オ やつとのことだ

(山梨県)

「解答」

問一 エ

問二 あやしゅう

問三 イ

問四 ア

【今昔物語】

【】（今は昔、安部仲麿といふ人）

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。（広島県）

今は昔、安部仲麿といふ人ありけり。遣唐使として物を習はしめむがために、かの国に渡りけり。あまたの年を経て、え返り来ざりけるに、またこの国より藤原清河という人、遣唐使として行きたりけるが、返り来たりけるに伴ひて返りなむとて、明州といふ所の海の辺にて、かの国の人うまのはなぬけしけるに、夜になりて月のいみじく明かかりけるを見て、はかなき事につけても、この国の事思ひ出でられつつ、恋しく悲しく思ひければ、この国の方をながめて、かくなむよみける、「あまのはらふりさけみればかすがなるみかさの山にいでしつきかも」といひてなむ泣きける。

（注）

- ・あまた：たくさん
- ・え返り来ざりけるに：帰国できなかったが
- ・うまのはなむけ：送別会
- ・いみじく：たいそう
- ・はかなき事：ちよつとしたこと
- ・あまのはら：大空
- ・ふりさけみれば：はるか遠くを眺めると
- ・かすがなるみかさの山：（故郷の）春日の地にある三笠山

問一 「習はしめむ」の平仮名の部分を現代仮名遣いに改めよ。

問二 「見て」の主語はだれか。文章中から抜き出せ。

問三 「あまのはらぶりさけみればかすがなるみかさの山にいでしつきかも」の和歌を五句に分けて考えるとき、作者の思いが最も強く表されているのはどこか。その句を抜き出して書け。

問四 「泣きける」とあるが、そのときの気持ちはどのようなふうであったか。二十五字以内で書け。

「解答」

問一 わしめん

問二 安部仲麿

問三 いでしつきかも

問四 故郷のことを思い出して恋しく悲しく思っている。

【】（今は昔、貫之が土佐守になりて）

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。（佐賀県）

今は昔、貫之が土佐守になりて、下りたてりけるほどに、任果ての年、七つ八つばかりの子、えもいはずをかしげなるを、限りなくかなしうしけるが、とかくわづらひて、失せにければ、泣きまどひて、病つくばかり思ひこがるほどに、月しろになりぬれば、「かくてのみあるべき事は。上がりなん」と思ふに、「児のこにてなにとありしはや」など思ひ出でられて、いみじう悲しかりければ、柱に書きつけける。

都へと思ふにつけて悲しきは 帰らぬ人のあればなりけり  
と書きつけたりける歌なん、今までありける。

（注）

- ・貫之：紀貫之
- ・土佐守：土佐の國の長官
- ・任果ての年：長官の任期が終わった年
- ・限りなくかなしうしけるが：深く愛し、育てていたが
- ・月しろになりぬれば：何か月かたってしまったので
- ・かくてのみあるべき事は。上りなん：こつしてばかりいられようか。都へ帰ろう
- ・児のこにてなにとありしはや：子供がここでこんなことをしていたなあ

問一 「えもいはずをかしげなる」の口語訳として最も適当なものを次の中から選べ。

ア もてあますほどいたずらである

イ なんとも言いようもないほどかわいらしい

ウ なんともおもしろくひょうきんである

問一 「書きつけける」の主語を文章中から抜き出して書け。

問二 「帰らぬ人」とはだれのことが。文章中から抜き出し、十字以内で書け。

問四 この文章の主題として最も適当なものを次の中から選べ。

ア 都を懐かしむ気持ち イ 病む子を思う気持ち

ウ 別れを悲しむ気持ち エ 亡き子を慕う気持ち

「解答」

問一 イ

問二 貫之

問三 七つ八つばかりの子

問四 エ

【】(今は昔、京に男ありけり)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、京に男ありけり。その妻、産(う)んで(も)つばら完食(くわんじき)肉食(にくじ)を願ひけり。男、心に思ひあつかひて(あれこれ思い悩んで)、いまだ明けな(あ)る(ま)は(や)ら、自(みづか)り(みづか)りて家を出でぬ。「池に行きて池にゐたらむ鳥を射て、この妻に食はしめむ」と思ふゆゑなり。池の辺(あた)りに寄りて草に隠れて、うかがひるたるに、鴨(かひ)の雄雌(おとこめ)、人ありとも知らずして近く寄り来たり。男これを射るに、雄を射つ。極めてうれしく思ひて、池に下りて鳥を取りて、いそぎて家に帰るに、喜れぬれば、棹(こし)のあるに打ちかけて置きて臥(ふ)しぬ。男、夜半ばかりに聞けば、この棹(こし)にかけたる鳥ふたふたとふためく(羽をばたばたと動かす)。「この鳥の生き返りたるか」と思ひて、起きて火を灯(とも)して行きて見れば、死にたる鴨の雄は死にながら(死んだまま)棹(こし)にかりてあり。傍(かたわ)らに出でたる鴨の雌あり。「雄の射殺されぬるを見て、夫を恋ひて、取りて来たる後(し)につきて、ここに来にけるなりけり」と思ふに、男あはれに悲しきこと限りなし。つひに夜明けて後も、この鳥の完(くわん)肉(にく)を食ふことなかりけり。

男、賣(う)き山寺(さんじ)へ行き、も(も)ど(も)り束(た)ねた髪(かみ)を切りて法師(ほうし)となりけり。

( ) 『今昔物語集』による

問一、傍線部 に「自ら弓を取りて家を出でぬ。」とあるが、これは何のためか。十五字以内で答えなさい。

問二、傍線部 の「うかがひるたる」を現代仮名づかいに改めなさい。

問三、傍線部 に「この棹(こし)にかけたる鳥ふたふたとふためく。」とあるが、これは何が羽をばたばたと動かしていたのか。文章中の三字の言葉で答えなさい。

問四、傍線部 に「男あはれに悲しきこと限りなし。」とあるが、「男」はどつしてこのような気持ちになったのか。〜と思ったから。「〜」という形で二十五字程度で答えなさい。

問五、傍線部 に「男、賣(う)き山寺(さんじ)へ行き、も(も)ど(も)りを切りて法師(ほうし)となりけり。」とあるが、この理由として最も適当なものを、次のア〜エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、男は、自分の妻のわがままに我慢できなくなっていましたから。

- イ、男は、鳥の不可解な行動が恐ろしくてたまらなかつたから。  
ウ、男は、自分のしたことの罪深さを悟り深く後悔したから。  
エ、男は、鳥を殺してしまったことを誰かに責められると思つたから。

(島根県)

「解答」

問一 鳥の肉を妻に食べさせるため

問二 うかがいいたる

問三 鴨の雌

問四 雌が死んだ雄を恋しがってついでにきたと思つたから

問五 ウ

【古今著聞集】

【】（ひちりき師用光）

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ひちりき師用光、南海道に向かふ時、海賊にあひにけり。まさにうちかからんとする時、用光、海賊に向かひていはく、「我ひさしくひちりきをもて朝につかへ、世にゆるされたり。今いふかひなく、賊徒のために害されんとす。これ宿業のしからしむるなり。しばらくの命をえさせよ。一曲吹かん。」といへば、海賊抜ける太刀をおさへて吹かせけり。用光、最後のつとめと思ひて、泣く泣く吹きにけり。その後、なさけなき群賊も感涙をたれて、用光をゆるしてけり。あまつさへ、淡路の浦までおくりて、おろしおきけり。諸道に長けぬるは、かくのごとくの徳を、かならずあらはすことなり。末代なほしかあることども多かり。

（古今著聞集）

問一 「世にゆるされたり」の意味を次のア～エから選べ。

ア どこで奏してもよいと朝廷に認められている

イ ひちりき師として世間に認められている

ウ 世間から自分のおかした罪をゆるされている

エ 南海道に向かうことを朝廷からゆるされている

問二 「いふかひなく」を現代仮名づかいに直して、ひらがなで答えよ。

問三 「なさけなき」の意味を次のア～オから選べ。

ア 風流なことなど解しない

イ 他人をゆるすことができない

ウ 悪事を反省しようとしめない

工 涙を流したことなどない  
オ 自分のことしか考えない

問四 「用光をゆるしてけり。」の理由として、最も適当なものを、次のア～エから選べ。

ア 朝廷につかえる用光をおそうことを反省したから。

イ 用光の前世の約束事に、同情の気持ちをいただいたから。

ウ 泣く泣くひちりきを吹く用光をなさげなく思ったから。

エ 用光の吹いているひちりきの音がすばらしかったから。

問五 「かくの」とく」とはどんなことか。「ひちりき・海賊・いのち」の三語を必ず用いて、四十字以内で説明せよ。

(熊本)

「解答」

問一 イ

問二 いかいなく

問三 ア

問四 エ

問五 用光がひちりきに秀れていたの、海賊を感動させて、いのちが助かったこと。

【】(信安といふものありけり)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

信安といふものありけり。世の中に強盗はやりたりけるころ、もし家さがさるる事もぞあるとて、強盗をすへらかさむ料に、日暮るれば、家の外に小竹を多く散らし置きて、つとめてはとりひそめけり。ある夜、家近く、焼亡のありけるに、あわてまどひて出づとて、その小竹にすべりて、まろびにけり。腰を打ち折りて、年の寄りたれば、ゆゆしくわづらひて、日数経てぞからくしてよくなりける。いたく支度の勝れたるも、身に引きかづくこそをかしけれ。

(古今著聞集)

問一 「まろびにけり」の主語はだれか。文章中の言葉で答えよ。

問二 「わづらひて」を現代仮名遣いに改め、平仮名で書け。

問三 「支度」について、次のA・Bの問いに答えよ。

A 「支度」の具体的な内容が述べられている部分を、文章中から十五字以内で抜き出せ。

B 信安が何の目的でこの「支度」をしたのが述べられている部分を文章中から十字程度で抜き出して答えよ。

問四 「身に引きかづく」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを次の中から選べ。

ア かえって年寄りにはいい薬になること

イ かえって取り越し苦労に終わってしまうこと

ウ 逆に身体の心配のしすぎにつながる事

エ 逆にわが身にふりかかって災いのもとになること

(島根県)

「解答」

問一 信安(といふもの)

問二 わずらいて

問三 A 家の外に小竹を多く散らし置きて B 強盗をすべらかさむ料に

問四 エ

【】(出御待つほど)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

出御待つほど、人々集まりゐて、さまざまの物語言ひかはすに、少将内侍御つばの楓の木を見出して、「この楓に初紅葉のしたりこそ、失せにけれ。」と言ひたりけるを、頭中将聞きて、「いづれの方が候ひけむ。」とて、梢を見上げれば、人々もみな目をつけて見るに、蔵人永継とりもあはず、「( )の枝にこそ候ひけぬ。」と申したりけるを、右中将実忠、この言を感じて、「このころは、(a) (a)「これほどの事も、心とくつち出づる人は」(b)「かたきにてあるに、優に候ふものかな。」とて、うちめきたるに、人々みな入興して、満座感嘆しけり。まこととりもあはず言ひ出づるも、また(c)「聞きとがむるも、いと優にぞ侍りける。」(d)「古今の歌に、

同じ枝を分きて木の葉の色づくは西こそ秋の初めなりけれど侍るを、思はえて言へりけるなるべし。

(古今著聞集)

問一 ( ) にあてはまる言葉を、漢字一字で文章中から抜き出せ。

問二 (a)「これほどの事」とは、何を指しているのか。次のア～エから選べ。

ア 蔵人永継の言葉    イ 初紅葉    ウ 物語    エ 古今の歌

問三 (b)「かたきにてあるに」とは、どついう意味か。次のア～エから選べ。

ア かたくなるしいのに    イ めつたにないのに  
ウ にくらしいのに    エ たいしたことはないのに

問四 (c) 「聞きとがむる」の主語はだれか。次のア～エから選べ。

ア 少将内侍    イ 頭中将    ウ 蔵人永継    エ 右中将実忠

問五 (d) 「古今」とは、「古今和歌集」を指すが、この歌集が成立したのはいつか。次のア～エから選べ。

ア 奈良時代    イ 平安時代    ウ 鎌倉時代    エ 室町時代

問六 次の文は、本文の解説である。( ) ( ) に適切な言葉を入れよ。ただしAには、四字、Bには三字の言葉を文中から抜き出せ。

「初紅葉はどこにあったか」という、日常的な話題に対して、(A) をもとにし、(B) 答えたことに、作者は知的な興味を感じている。

(長崎)

「解答」

問一 西

問二 ア

問三 イ

問四 エ

問五 イ

問六 A 古今の歌    B 心とく



(兵庫県)

「解答」

問一 ア エ

問二 ア

問三 のじわずらう いいわらにけるおじ

問四 左右一対で用いるものだ



問五、ゆゆしき相人にておはしましけり、の意味として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア、不吉な人相をした人でいらつしやつた。

イ、すぐれた大臣でいらつしやつた。

ウ、すばらしい人相見でいらつしやつた。

エ、とんでもない大臣でいらつしやつた。

問六、本文の内容と合っているものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア、伊通は容貌をとても気にしており、井戸や鏡に何度も自分の姿を映して深く思い悩んだ。

イ、伊通は納得できないことがあったとき、その意味することを落ち着いて考えることができた。

ウ、伊通は鏡の中に見えるものを手がかりにして、様々な政治的問題を片づけていった。

エ、伊通は井戸の底に同じものが見えるか、別の井戸で確かめてみるような慎重な人間だった。

(長崎県)

「解答」

問一 ア

問二 丞相 はるかに程へて

問三 しずかに案じ給つに

問四 鏡にて

問五 ウ

問六 イ

【】( 絵難房といふもの候ひけり)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

絵難房えなんぼうといふもの候うひけり( 絵難房という者がおりました)。いかによく書きたる絵にも必ず難を見いだすものなりけり。ある時、ふるき上手うまいども( 昔の絵の名人たち)の書きたる絵本( 絵の手本)の中に、人の( 人が)犬を引きたるに( 引いている場面で、犬すまひてゆかじとしたる体)逆らつて進むまいと踏ん張ふんぢっている様子)、まことにいきてはたらく様( いきいきと描かれている)なり。また男のかたぬぎて( 上半身裸になつて)、たつきふりかたげて( 大きなおのを振り上げて)大木を切りたるあり。法皇の仰おほせに( おっしゃることには)、「これをば絵難房も力及ちからばじものを。」とて、即すなはち召よして見せられければ( たち呼よび出してお見せになられたこと)、よくよく見て、「めでたくは( りっぱに)書きて候うが、難少々候むづかふ。これ程すまひたる犬のくび縄( くび縄)は、したはらのしたよりよくひきすこされて候うべきなり( ぴんと張はつて描かれるべきです)。これは犬はすまひて、くび縄普通なる体に見え候うなり( ゆるんで見えます)。また木切りたる男めでたく候う。但ただしこれ程の大木をなからすぎ( 半分以上も)切り入れて候うに、只今ただ散りたる( けらばかりにて)木くすだけで、前に散りつもりたるなし。これ大きな難に候う。」と申しければ、法皇仰おほせらるる事もなくて、絵ををさめられにけり。

( ) 「古今著聞集」 よ( )

注 法皇 後白河法皇のこと。

問一、「すまひて」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書きなさい。

問二、次はグループ学習をしている中学生の会話の一部である。これを読んで、あとの( 1 ) ( 2 )の問いに答えなさい。

Aさん 「絵難房は、どんなにじょうずな絵であつても難点を見つけたして指摘する人物であることが( ) ( )という部分からわかるわ。」

Bさん 「しかしある時、法皇は名人たちの絵を見て、絵難房であつてもこれらの絵の難点を指摘することは( ) ( )であらうと考えたのね。」

Cさん 「でも、じっくり絵を見た絵難房は、難点をきちんと指摘したね。」

Aさん 「絵難房から難点を指摘され、予想がはずれて言葉もなく絵をしまった法皇の姿が目に見えかぶようだわ。」

(1) ( ) にあてはまる最も適当な言葉を、本文(文語文)中から二十二字でそのまま書き抜きなさい。

(2) ( ) にあてはまる最も適当な言葉を、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア、無理 イ、不要 ウ、容易 エ、確実 オ、有益

問三、絵難房は、男が大木を切っている様子を描いた絵にはどのような難点があると指摘したか。四十字以内で説明しなさい。

(福島県)

「解答」

問一 すまいて

問二 (1) いかによく書きたる絵にも必ず難を見いだすもの (2) ア

問三 たった今散った木くずだけで、これまでに散りつもった木くずが描かれていないこと

【】(嫡女、七歳の年)

次の文章には、琵琶の演奏の第一人者と言われた藤原孝時と、彼の長女のこと書かれている。「この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。」

嫡女(ちやくにょ)長女が、七歳の年、あまりに不用(ちよう)に練習を怠(た)けて、(ア)走り遊びけるを、懲(ちが)らさむとて、孝時が「しめよ」として、所持の小琵琶(せじゆ)持たせていた小ぶりの琵琶(びわ)をとり隠(かく)して、「はやく不用(ちよう)を道にたてて、さうさと怠(た)けることを仕事にして、琵琶(びわ)なごをば心になかけそ(忘れてしまいなさい)。「とて、しばし(イ)とり隠(かく)したりけるを、をさなき心(おさましく)ひどく(ウ)嘆(なげ)きつゝ、乳母(うぶ)にとすれば、乳母を通じて折に触れて、うれへ怠(た)状(じやう)しけれども、悲しい気持ちを訴えては謝(あやま)つたが、なほ許(ゆる)さず。」

かかるほどに(エ)うじているうち、母、賀茂(かも)へ(お参りをするときに、この少人を具したりけり)女の子を連れて行った。下向(げかう)(家へ帰つて)の後、「さても(エ)ころで、賀茂にては何事を申しする。「と問はれて、「ただ琵琶をよく弾かせさせ給へ」とこそ申しつれ)思(おも)つ存分に弾けるようにさせてくださいます。「とぞ答へける。「この詞(ことば)をあはれみて、勘当(かんと)許(ゆる)して、勘当を取り消して、小琵琶(こびわ)かへし与(よ)へければ、(エ)悦(よろこ)びて、これより心に入れて道をたしなみ、功をいれたる事第一なりとぞ)高い技量を会得(くわいとく)したことは当代第一であった。」

(「古今著聞集」による)

問一、「まづでけるに」を、現代かなづかいで書きなさい。

問二、傍線部ア～エの中で、その主語に当たるものが他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三、長女の琵琶への取り組み方は、後半ではどのようなになったか。前半と比較して変わったことが分かる、長女の琵琶への取り組み方を表している語句を抜き出しなさい。

問四、傍線部 では許さなかつた孝時が、傍線部 で許したのは、長女に対する見方がどのように変わったからか。変化のきっかけとなつた出来事を含めて書きなさい。

(静岡県)

「解答」

問一 もうでけるに

問二 イ

問三 心に入れて

問四 神社での願い事が琵琶を弾けるようにしてほしいということだけだったと聞き、琵琶に対して真剣な気持ちをもっているという見方に変わったから

【】(博雅の三位の家に)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

博雅の三位の家に盗人入りたりけり。三品、板敷のしたに逃げかくれにけり。盗人帰り、さて後、はひ出でて家中を見るに、のりたる物なく、みなとりてけり。ひちりき一つを置物厨子おぼもものすてにのこしたりけるを、三位とりてふかれたりけるを、出でてさりぬる盗人はるかにこれを聞きて、感情おさへがたくして帰りきたりて、いふやう、「只今の御ひちりきの音をつけたまはるに、あはれにたふとく候ひて、悪心みなあらたまりぬ。とる所の物どもごとくとくに返したてまつるべし」といひて、みな置きて出でにけり。むかしの盗人は、またかく儂おぼなる心もありけり。

(古今著聞集より)

注 博雅の三位 平安時代の貴族、源博雅のこと。

注 三品 博雅ノ三位のこと。

注 ひちりき 昔の楽器、一種の竹笛。

注 置物厨子 とびらつきの物入れ。

注 出でてさりぬる 出で行ってしまった。

問一、いふはだれの動作ですか。本文中から抜き出しなさい。

問二、たふとくの読み方を、現代の仮名遣いに直し、ひらがなで書きなさい。

問三、次の文は本文の内容を要約したものです。A、Bにあてはまる最も適切なことばを、本文中からそれぞれ五字程度で抜き出して書き入れなさい。

むかしの盗人には、人の家に盗みに入っても、美しい(A)を聞いて深く感動し、盗品のすべてを返してしまうような(B)もあつた。

(富山県)

「解答」

問一 盗人

問二 とつとく

問三 A ひちりきの首 B 優なる心

【宇治拾遺物語】

【】（今は昔、藤六といふ歌よみありけり）

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

今は昔、藤六といふ歌よみありけり。あやしき者の家に入りて、人もなかりける折を見つけて、入りにけり。鍋なべに煮にけるものをすくひけるほどに、家あるじの女、水を汲みて、大路おほじの方より来てみれば、かくすくひ食へば、いかにかく人もなき所に入りて、かくはするものをば、まるるぞ。あなうたてや、藤六にこそいましけれ。さらば歌詠うたみ給たまへと言ひければ、

昔より阿弥陀あみだ仏ぼつの誓ちかひにて煮ゆるものをばすくふとぞ知る  
とこそ詠うたみたりけれ。（宇治拾遺物語）

問一 「人もなかりける」を口語訳しなさい。

問二 「まるるぞ」の意味として最も適当なものを次の中から選べ。

ア 弱りましたね                      イ 見つけましたね

ウ おがむのですか                      エ 食べるのですか

（長崎県）

「解答」

問一 人もいなかった

問二 エ

【】(今は昔、唐に)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

今は昔、唐に、孔子、道を行き給ふに、八つばかりなる童あひぬ。孔子にとひ申すやう、日の入る所と洛陽と、いづれか遠きと。孔子いらへ給ふやう、日の入る所は遠し。洛陽は近し。童の申すやう、日の出で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば、日の出づる所は近し。洛陽は遠しと思ふと申しければ、孔子、かしこき童なりと感じ給ひける。(宇治拾遺物語)

問一 「とひ」を現代仮名遣いに改め、平仮名で書け。

問二 文章中には童が話している部分が二つある。一つめの部分はどこか。そのまま抜き出せ。

問三 「かしこき童なり」と孔子が「感じ」たのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選べ。

ア 童の考え方が興味深いから

イ 童が地理に詳しいから

ウ 童の質問が大人びているから

エ 童が礼儀正しいから

(宮城県)

「解答」

問一 とい

問二 日の入る所と洛陽と、いづれか遠き

問三 ア

【】(昔、延喜の御門の御時)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

昔、延喜の御門の御時、五条の天神のあたりに、大きな柿の木、実ならぬあり。その木のうへに、仏あらはれておはします。京中の人、こそりて参りけり。馬、車もたてあへず、人もせきあへずおがみののしりけり。

かくするほどに、五、六日あるに、右大臣殿、心得ずおぼし給ひける間、まことの仏の、世の末に出で給ふべきにあらず、我、行きて試みんとおぼして、日の装束づるはしくて、びりやうの車にのりて、御前多く具して、集まりつとひたる者ともわけさせて、車かけはづして櫛をたてて、「さずるを、めもたたかず、あからめせずして、まもりて、一時ばかりおはするに、この仏、しばしこそ、花もふらせ、光をもはなち給ひけれ、あまりにあまりにまもられて、しわびて大きなくそとびの羽おれたる、土におちて、まどひふためくを、童部どもよりて、うちころしてけり。大臣は、さればこそとて、帰り給ひぬ。」(宇治拾遺物語)

問一 の「の」と同じ用法のものを次の中から選べ。

ア わたしの好きな本を教えよう。

イ 行くのか、行かないのか、はっきりしなさい。

ウ 部屋の中で遊ぶ方がいい。

エ 泳ぐのが得意らしい。

問二 「行きて試みん」とあるが、右大臣は何を確かめようとしているのか。最も適当なものを次の中から選べ。

ア 現世に仏の存在を信じてよいのかどうか。

イ 柿の木に現れた仏が本物がどうか。

ウ 世の末に現れた仏に御利益があるのかどうか。

エ 大きな柿の木に本当に実がなっていないのかどうか。

問三 「あからめもせずして、まもりて」の口語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア あきらめずに、じっと見つめて

イ じっと見つめて、お守りして

ウ 顔が赤くなるのも忘れて、お守りして

エ わき見もせずに、じっと見つめて

問四 「しばしこそ」はどの部分にかかっているか。最も適当なものを次の中から選べ。

ア うちころしてけり

イ あまりにあまりにまもられて、しわびて

ウ 花もふらせ、光をもはなち給ひけれ

エ まどひふためく

問五 この話から、右大臣はどのような人物であると考えられるか。最も適当なものを次の中から選べ。

ア 人の噂にすぐ飛びつくような野次馬根性の強い軽率な人

イ 高貴な人だが、仏の存在を信じないような信仰心の薄い人

ウ 人々の注目を一身に浴びることを好む、目立ちたがりやの人

エ 自分で納得のゆくまで、ものごとをつきとめないと気がすまないような人

(豊島岡女子学園高)

「解答」  
問一 ア  
問二 イ  
問三 エ  
問四 ウ  
問五 エ

【】(二十日はかりありて)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

二十日はかりありて、この女の居たる方に、雀すずめのいたく鳴く声しければ、「雀こそいたく鳴くなれ。ありし雀の来るにやあらん」とおもひて、出でてみれば、この雀なり。忘れず来たるこそあはれなれといふほどに、女の顔を(ア)うち見て、口より露ばかりの物を落とし置くやうにして、飛びて去ぬ。女、「何にかあらん。雀の落として去ぬる物は」とて、寄りて見れば、ひさしの種をただ一つ落として置きたり。

「持て来たるやうこそあらめ」とて、取りて持ちたり。「あないみじ、雀の物得て、宝にしたまふ」とて、子ども(イ)笑入ばさはれ植えてみん」とて、植えたれば、秋になるままに、いみじく多く生ひ広がりて、なべてのひさしにも似ず、(ウ)大きに多くなりたり。女よるこび興じて、里どなりの人にも(エ)食はせ、取れども取れども尽きませず多かり。(宇治拾遺物語)

問一 「雀こそいたく鳴くなれ」のように「こそ」に呼応して「なれ」と已然形になるような文語文法上の法則を何と言つか。

問二 「おもひて」を現代仮名遣いに改め、平仮名で書け。

問三 文章中に「この女」が言った言葉として、「でくくるべきところが一箇所ある。その言葉をそのまま抜き出せ。

問四 「出でてみれば」と同じ主語をもつことのできる語句を(ア)～(エ)の中から一つ選べ。

問五 「何にかあらん」の口語訳として、最も適当なものを、次の中から選べ。

ア 何かしら イ だれかしら ウ なぜかしら エ どこかしら

問六 この文章のあらすじとして、最も適当なものを、次の中から選べ。

- ア 以前助けた雀がひさこの種をたくさん持ってきたので、女は喜んでそれを里の人たちみんなに分けてやった。
- イ 以前助けた雀がひさこの種を持ってきたので、女が植えてみると秋には食べきれないほどの実をつけた。
- ウ 以前助けた雀が大きなひさこの種を持ってきたので、子どもたちは感心してその雀を飼ってやることにした。
- エ 以前助けた雀が口から露を落として飛び去ると、やがてそこからひさこの芽が出て、秋に多くの実をつけた。

(福岡県)

「解答」

問一 係り結び(の法則)

問二 おもいて

問三 忘れず来たるこそあはれなれ

問四 エ

問五 ア

問六 イ

【その他】

【】(芝三島町に菓子をあきなふ)

次の文章は、江戸の芝三島町(現在の東京都港区芝大門)で菓子店を営む新右衛門と、彼の店に日用品などを売りに来る行商人たちとのかわりを扱ったものである。これを読んで、各問いに答えなさい。

芝三島町に菓子をあきなふ新右衛門といへるは\*少欲至直にして、\*日ごとに買ふ品の価をあらそふ事なく、売る人の言ふままにまかせてもとめければ、(1)家内の者いぶかりて、「商人はいづれも同じ事にて、その価の高下をあらそふならびなるに、\*いかなればか言ふままにはしたまふぞ。」と言ふを聞きて、「かれらは日ごとに重きを荷ひて、朝は\*とく出で、夕べには遅く帰る。」ことに暑寒の折からはそのくるしみ言ふべくもあらじ。\*おのれらは年中店に居て風雨のうれへもなく家業を営むは(2)有りがたき事ならずや。たとひ人にも施す事は為しがたくとも、せめてはその価をあらそはずしてもとめなば、少しはかれらがたすけともならんか。」と言ひける。後々は新右衛門が情ある事を知りて、(3)売る者も価を低くして持ち来たりしとなん。

(1)「仮名世説」から

(注1) 至直 = 非常に正直なこと

(注2) 日ごと = 毎日

(注3) いかなれば = どのようにして

(注4) とく = 早く

(注5) 言ふべくもあらじ = 言葉で表現できないほどだろつ

(注6) おのれらは = 自分たちは

(注7) うれへ = 心配

問一、あらそぶならひは現代ではどう読むか。現代かなづかいを用いて、すべてひらがなで書きなさい。

問二、家内の者がいぶかりてとあるが、家の者は新右衛門のどのような行為について不審に思ったのか。

ア、行商人の希望するとおりの商品を探し出して分け与えたこと。

イ、口げんかもせずに行商人の訴える苦しみを聞いてあげたこと。

ウ、少欲で正直なふりをして相手の商品をだまし取っていたこと。

エ、値引きの交渉もせず相手の言う値段で商品を買っていたこと。

問三、有りがたき事ならずやとあるが、どんなことを「有りがたき事」と言っているのか。現代語で三十字以内で書きなさい。

問四、言ふ 言ひ 知りについて、それぞれの主語にあたる人物の組み合わせとして適切なものはどれか。

ア、家内の者 売る者 新右衛門

イ、家内の者 新右衛門 売る者

ウ、新右衛門 売る者 家内の者

エ、新右衛門 家内の者 売る者

問五、(3) 売る者も価を低くして持ち来たりしとあるが、売る者が値段を下げたのはなぜか。

ア、正直者で自分たちの言いなりになる新右衛門に同情したため。

イ、新右衛門が家の者から疑われているとわかって哀れんだため。

ウ、新右衛門の誠意に対して自分たちもまた誠意でこたえるため。

エ、毎日ものを施してくれた新右衛門に感謝の気持ちを表すため。

(栃木県)

「解答」

問一 あらそつなさい

問二 エ

問三 自分たちは年中店において風雨の心配もなく家業を営んでいること

問四 イ

問五 ウ

【】（観世太夫、旅にて）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

観世太夫、旅にて隣家に謡をつたふを聞き、「かれを止めさせてみせん。」とて、一曲つたひ出だしければ、しばしの後、かの謡は止みぬ。また次の宿にても、隣家にて謡をつたふ声の聞こえたるに、前夜のことを供の者言ひ出だして、「前のことくにされたし。」と望みければ、「これは、かなひがたし。なんとなれば、さきの謡はよほど巧みなりしゆゑ、わが声を発すると聞きとめて、こなたを細かに聞き、自分のわざを恥ぢて、止めつるなり。「この夜の謡は他の善悪を聞き知るほどのわざにあらずれば、なにほどこなたにてうたひても通じざれば、すべきやうなし。」と答へしぞ。すべてのわざかくのことし。ただこれのみにあらず、うてどもひびかざる者、いと多し。

問一 「止めさせてみん。」を現代の言葉で表せ。

問二 「かの謡は止みぬ。」の理由を表す言葉を、文章中から九字で抜き出せ。

問三 「かなひがたし。」とだいたい同じ意味を表す言葉を、文章中から七字で抜き出せ。

問四 「わが声を発する」のはだれか。また「うてどもひびかざる者」はだれか。次から選べ。

ア 観世太夫 イ 供の者 ウ 前夜、隣家で謡をつたつた者

エ 今夜、隣家で謡をつたつた者

問五 次の人物の中から、能楽を大成した人を選べ。

ア 柿本人麻呂 イ 世阿弥 ウ 近松門左衛門 エ 藤原定家

（福井）

「解答」

問一 やめさせてみせよう。

問二 自分のわざを恥じて

問三 すべきやうなし

問四 ア エ

問五 イ

【】(元啓と言ふ者ありけり)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

元啓と言ふ者ありけり。年十一の時、父、妻が言に付きて、年たけたる親を山に捨てむとす。元啓しきりにいさむけれど、用ゐずして、元啓と二人、あからさまに手輿を作りて、持ちて深山の中に捨てし。元啓、「この輿を持ちて帰らむ」と言ふに、父、「今はなににせむぞ、捨てよ」と言ふ時、「父の年老いたらむ時、また持ちて捨てむするためなり」と言ふ。その時、父心づきて、「我、父を捨つることまことに悪しきわざなり。」「これを學びて、我を捨つることありぬべし。よしなきことをしするなるべし」と思ひ返して、父を具して帰りて養ひける。

「このこと天下にきこえて、父を教へ祖父を助けたる孝養の者なりとて、孝孫とぞ言ひける。」(沙石集)

問一 「用ゐず」を現代仮名づかいに直して答えよ。

問二 「これ」は、どのようなことですか。つぎのア、エから選べ。

ア 元啓が元啓の父をいさめたこと

イ 元啓の父が元啓の祖父を捨てたこと

ウ 元啓が元啓の祖父を助けたこと

エ 元啓の父が元啓の祖父を養ったこと

問三 「父を具して帰りて養ひける。」とあるが、元啓の父がそつしたのはなぜか。次から選べ。

ア 手輿のようなものでもたいせつにし、さらに親には孝行すべきであると元啓にいさめられてふかく反省したから。

イ 元啓の言葉によって世間のうわさに対しても気を配り、親を大事にしなければならぬと反省したから。

ウ 元啓の言葉を聞いて自分の誤りを認め、やがて元啓が自分をも捨てるような悪いことをするだろうと反省したから。

エ 父親の姿があまりにもかわいそうであり、さらに世間の元啓に対する評判をよくしなければならぬと反省したから。

(半世)

「解答」

問一 用いず

問二 イ

問三 ウ

【】(孟宗はいとけなくして)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

孟宗はいとけなくして父に後れ、ひとりの母を養へるに、母、年老いてつねに病みいたはり、食の あぢはひも度ごとに変はりければ、よしなき物を望めり。冬のことなるに、竹子をほしく思へり。すなはち孟宗竹林に行き求むれども、雪深き折なれば、なかたやすく得べき。ひとへに天道の御あはれみを頼みたてまつるとて祈りをかけて大きに悲しみ、竹に寄り添ひけるところに、にはかに大地ひらけて、竹子あまた生ひ出ではべりける。大きに喜び、すなはち取りて帰り、あつものにつくり、母に与へはべりければ、母これ食してそのまま病も癒えたり。(御伽草子)

問一 「あぢはひ」を現代仮名づかいに直して、ひらがなで答えよ。

問二 「よしなき物を望めり。」の現代語訳として最も適当なものはどれか。次のア～エから選べ。

ア 手に入りにくいものをほしがった。

イ 地上にないものをほしがった。

ウ 病気に悪いものをほしがった。

エ 高価なものをほしがった。

問三 「すなはち」の意味として、最も適当なものを、次のア～エから選べ。

ア まもなく    イ その後    ウ すぐに    エ そのころ

問四 文中の から始まる孟宗が心の中で思った内容はどこで終わるのか。終わりの五字をそのまま抜き出して答えよ。

問五 この文章を内容のうえから二つの段落に分けるとすれば、どこで分けるのが最も適当か。二つに分けた場合の後半の段落の最初の四字を抜き出して答えよ。

問六 この文章は一つの教訓を含んだ話と考えられるが、どんな教訓を述べているか。次のア～エから選べ。

ア 親子のきずなは堅いという教訓

イ 不幸は幸福の種になるという教訓

ウ 自然の恩恵は偉大であるという教訓

エ 孝心は天に通ずるといふ教訓

(島根)

「解答」

問一 あじわい

問二 ア

問三 ウ

問四 たてまつる

問五 冬のこと

問六 エ



【】(もろこしの国に)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

もろこしの国に、むかし孫康といひける人は、いたく学問を好みけるに、家貧しくして、油をえ買はざりければ、夜は雪のひかりにて ふみを読み、また同じ国に車胤といひし人も、いたくふみ読むことを好みけるを、これも同じやうにいと貧しくて、油をえ得ざりければ、夏のころは蛍をあつめてなむ読みける。この二つの故事は、いといと名高くして、知らぬ人なく、うたにさへおほくよみけり。今思ふに、「これからも かの国人の、例の名をむさほりたるつくりごととそありける。そのゆゑは、もし油をえ得ずは、よるよるは、ちかどなりなどの家にもおして、そのともし火の光をこひかりても、ふみは読むべし。たとひそのあかり 心にまかせずはつはつなりとも、雪・蛍にはこよなくまさりたるべし。また年のうちに、雪・蛍のあるはしばしのほどなるに、それがなきほどは、よるはふみ読までありにけるにや、いとをかし。(玉勝間)

問一 「ふみ」の意味として最も適当なものを、次のア～エから選べ。

ア 手紙    イ 和歌    ウ 日記    エ 書物

問二 「この二つの故事」をもとにしてできた有名な成句がある。文章中の漢字を用いて成句を完成せよ。また、その意味を簡単に答えよ。

成句 (                      ) の功

意味 (                      )

問三 「うたにさへおほくよみけり。」を現代仮名づかいに直してすべてひらがなで答えよ。

問四 「かの国人」とは、どこの国の人か。文章中の言葉を使って答えよ。

問五 「心にまかせず」の意味として最も適当なものを、次のア～エから選べ。

ア 思いどおりでなく      イ 思ったとおりに

ウ 思うぞんぶん      エ 思わず知らず

問六 「それ」は何を指しているのか。文章中の言葉で答えよ。

問七 「いとをかし。」と言ったのは、作者のどんな気持ちからか。次のア～エから選べ。

ア もろこしの国には言や虫を愛した人がいたそうだが、風流な話だ。

イ もろこしの国には名声を得るために学ぶ人がいたそうだが、心の狭い話だ。

ウ この故事についてはなるほどは思うが、考えてみるとどうも変な話だ。

エ この故事は、熱心に学ぶことの尊さを教えてくれる立派な話だ。

問八 この文章を内容のうえから二つの段落に分けるとすれば、どこで分けるのが最も適当か。二つに分けた場合の後半の段落の最初の五字（句読点を含む）を抜き出して答えよ。

（島根）

「解答」

問一 エ

問二 虫書、苦学して立派に成功すること。

問三 うたにさえおおくよみけり

問四 もろこしの国（の人）

問五 ア

問六 雪・螢

問七 ウ

問八 今思ふに

【】(昔、殿上の男子ども)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔、殿上の男子ども、花見むとて、東山におはしたりけるに、にはかに心なき雨の降りて、人々、逃げ騒ぎたまへるが、実方の中将、いと騒がず、木の下に寄りて、

桜がり雨は降りきぬ同じくは濡るとも花の陰に暮らさむ

と詠みて、かくれたまはさりければ、花より漏り下る雨にさながら濡れて、装束しほりかねはへり。このこと、興あることに、人々、思ひ合はれけり。

問一 「桜がり雨に降りきぬ同じくは濡るとも花の陰に暮らさむ」の歌にこめられている気持ちとして、最も適当なものを、ア～エから選べ。

ア 春の雨ならぬれてもよい、という気持ち

イ 花の陰なら雨にもぬれまい、という気持ち

ウ もう一度花を見に来よう、という気持ち

エ 花とともに時を過ごしたい、という気持ち

問二 「このこと」は、どのようなことを指しているか。その内容を三十字以内で答えよ

(静岡)

「解答」

問一 エ

問二 実方の中将が雨にぬれながら、桜の木の下で歌をよんだこと。

【】(ある翁に、「かの人はいかなる人にか。」ととへば)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある翁おきなに、「かの人はいかなる人にか。」ととへば、「いとよき人なり。」と答ふ。「かれは。」といへば、「よき人。」といふ。かならずかれをばあしきといはんを、えらびて たづねみるに、「よき人。」と答ふ。「いかなることぞ。」とたづねしに、「人を見るには、まづ十にして五つばかりもよきことあるは、いとよき人とみるべし。十にして一つ二つもよきことあるは、よき人なり。十にして皆あしきをば、あしきと心得たまへ。」といひしとぞ。

問一 「かれは」、「よき人」のあとにそれぞれ省略されている語句を補つとすれば、どんな語句がよいか。最も適当なものを文章中からそのまま抜き出せ。ただし、は七字、は二字とする。

問二 「たづねみる」とは、だれにたづねみるのか。だれにあたる三字の語句を、文章中から抜き出して答えよ。

問三 文章中で、「よき人」とは、どのような人と述べられているか。次のア～エから選べ。

ア 「よきこと」ばかりある人

イ 「よきこと」と「あしきこと」が半分ずつある人

ウ 「あしきこと」ばかりある人

エ 「よきこと」が少しでもある人

問四 文章中の会話は、主として何についてなされているか。最も適当なものを次のア～エから選べ。

ア 「かの人は」ということについて  
イ 「えらびて」ということについて  
ウ 「人を見るには」ということについて  
エ 「十にして」ということについて

(福岡)

「解答」

問一 いかなる人にか なり

問二 ある翁

問三 エ

問四 ウ

【】(あまの原ふりさけみれば)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

〔原文〕あまの原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも

この歌は、むかし、仲鷹なかたかをもろこしにもの習はしに遣はしたりけるに、あまたの年を経て、え帰りまつで来きざりけるを、この国よ  
りまた使ひまかりたりけるにたぐひて、まづで来きなむとて、出で立ちけるに、明州めいしゅうといふところの海辺にて、かの国の人、馬の  
はなむけしけり。夜になりて月のいとおもしろくさし出でたりけるを見て、よめるとなむ語り伝ふる。

〔現代語訳〕大空をはるかながめやると、月が昇っている。あの月はかつて故国の春日にある三笠山に昇っていた月なのだなあ。  
この歌は、昔、仲鷹を中国に勉強させるために派遣したところ、長年たっても帰国できなかつたが、日本からまた遣唐使が行った  
ときに、連れ立って帰国しようとして出発したところ、明州というところの海辺で、中国の人が送別の宴を開いた。夜になって月が  
( ) (昇ってきたのを見て、よんだ歌であると語り伝えている。)

問一 「かの国」とはこの国か。原文からそのまま抜き出して四字で答えよ。

問二 「いとおもしろく」の現代語訳を次から選べ。また、「おもしろく」の品詞名を答えよ。

ア ひどく寂しげに イ やや懐かしげに

ウ たいそう趣深く エ はなはだ心細く

問三 「なむ語り伝ふる。」で使われている文法上の決まりを何というか。

(愛知)

「解答」

問一 もろこじ

問二 ウ・形容詞

問三 係り結びの法則

【】(都を出でて、日数経れば)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

都を出でて、日数経れば、弥生もなれば過ぎ、「」 「もすでに暮れなんとす。遠山の花は残んの雪かと思えて、浦々島々霞みわたり、来し方行く末の事も思ひつづけたまふに、「さればこれはいかなる宿業のつたてさぞ。」とのたまひて、ただつきせぬものは涙なり。

御子の一人も おはせぬ事を、母の二位殿も嘆き、北の方大納言典侍殿も本意なきことにして、よろづの神仏に祈り申されけれども、そのしるしなし。「かしこうぞなかりける。子だにあらましかば、いかに心苦しからん。」とのたまひけるこそ、せめての事なれ。

小夜の中山にかかりたまふにも、また越ゆへしともおぼえねば、いとどあはれの数そひて、袂ぞいたくぬれまざる。(平家物語)

問一 「」に入る最も適当なものを次の中から選べ。

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

問二 「ただつきせむものは涙なり」とは「とめどなく涙が流れる」という意味であるが、これと同じような意味を比喩的に表現している部分を文章中から抜き出せ。

問三 「おはせぬ」を現代仮名遣いに改め、平仮名で書け。

問四 「のたまひける」とあるが、平重衡はどのようなことを言っているのか。分かりやすく書け。

- 問五 「また越ゆべしともおぼえねば」の解釈として最も適当なものを次の中から選べ。
- ア 再び越えるつもりにもなれないので
  - イ 再び越えることができるとも思われないので
  - ウ 再び越えなければならないとも思うので
  - エ 再び越えることができないとも思われないので

(山口県)

「解答」

問一 ア

問二 袂ぞいたくぬれまさる

問三 おわせぬ

問四 子供がいたらどんなに苦しいことだろう

問五 イ

【】(紀貫之、夜中に和泉の国を)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

紀貫之、夜中に和泉の国を通られけるが、乗りたる馬、にはかに足を折りて進み行かず。道行く人のいふ、これはこの所にいます神の所為なりと申しければ、貫之ただちに馬より下り立ちて、そもそも何の神とか申すと問へば、かの人蟻通しの神と申すといへば、貫之、

(A) かき曇りあやめも知らぬ大空にありと星をば思ふべきかはと詠まれければ、かの馬たちまち起き上がり常よりもまされる駿足となれたり。

問一 「道行く人」の話した言葉が、本文中に二か所ある。そのうち、二度目に話した言葉を、そのまま抜き出して答えよ。

問二 「これ」の指している内容を、現代語で答えよ。

問三 「なん」は、結びの語と係り結びの関係になって意味を強めるはたらきをもつ助詞であるが、これと同じように結びの語と係り結びの関係になって、疑問の意味を表す助詞が、「そもそも何の神とか申すと問へば」に一つある。その助詞を抜き出して答えよ。

問四 次の文は、本文中の(A)の歌について説明しようとしたものである。文中の( )にあてはまる最も適当な言葉を、(A)の歌の中からそのまま抜き出して答えよ。

この歌の表面の意味は、「このようにかき曇って何の区別もつかない大空に、星があるなどと思うはずがありませんか。」という意図であるが、蟻通しという言葉( ) ( )という言葉に隠して詠むことになって、「蟻通しの神の神前とは少しも知りませんでした。」という意図も同時に表して、神に対するおわびの気持ちを表そうとしたのである。

(香川)

「解答」

問一 蟻通しの神となん申す

問二 貫之の乗っていた馬が、突然足を折って進まなくなったこと

問三 か

問四 ありと屋

【】(石ばしる垂水の上のさわらびの)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

- A 石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも
- B 道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ
- C 見渡せば花もみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ
- D 風吹けば落つるもみぢ葉水清み散らぬかけさへ底に見えつつ
- E 田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける

問一 A～Eは四季の自然を詠んだ歌である。心細くわびしい情景を詠んだ歌はどれか。最も適当なものをA～Eの中から選べ。

問二 Bの歌では、助詞「こそ」と、結びの言葉「立ちどまりつれ」の「つれ」とが対応している。「こついつ対応を「係り結び」という。B以外の歌で、「係り結び」が用いられている歌はどれか。一つ選べ。

問三 次の文章は、A～Eの中のある歌の鑑賞文の一節である。(この鑑賞文の) ( )に入る言葉として最も適当なものを、その歌の中から、五字でそのまま抜き出せ。

紅葉は水の表面に浮かびながら流れていきます。ところが水の清らかさときたら、まるで底まで紅葉が映るほどで、散る紅葉だけでなく、「( )」( )までも水の底に映っているというのです。

問四 AとEは、ともに「万葉集」の歌である。次の文章は、「万葉集」の特徴を述べたものである。( ) ( )に入る最も適当なものを、後から選べ。

現存するわが国最古の歌集。二十巻。( ) ( )歌が多い。奈良時代の末ごろに現在の形にまとめられた。

ア 繊細な感情を詠んだ イ 優美な世界を詠んだ ウ 素朴な感動を詠んだ

エ 流麗な調べを詠んだ

(福島県)

「解答」

問一 C

問二 E

問三 散らぬかけ

問四 ウ

【】蛙は古今の序にかゝれてより

蛙は古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。臘月夜の風しつまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目なましたれば、此物の事さらにも誇りがたし。

蝉は只五月晴に聞きそめたるほどがよき也。やゝ日さかりに啼きさかる頃は、人の汗しほる心地す。されば初蝶とも初かはつともいふ事をきかず。此物ばかり初せみといはるこそ大きな手がらなれ。

(注) 古今の序にかゝれてより…古今和歌集の序文に(蛙も歌を詠むと)書かれて以来

部：仲間

さらにも誇りがたし…なおさら悪くいっわけにはいかない

五月晴：夏の晴れ間

聞きそめたるほど…初めて声を聞くころ

されば…だから

問一、傍線 「遠く聞ゆるはよし」とありますが、作者が「遠くから聞こえてくるのがすばらしい」と言っているのは何の声または音のことですか、ア、エから選びなさい。

ア、蛙 イ、風 ウ、翁 エ、蝉

問二、傍線 「古池に飛んで翁の目なましたれば」とありますが、この「翁」は「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」という句を詠んでいます。この「翁」が詠んだ句を、ア、エから選びなさい。

ア、初つばめ父子に友の来てるる日

イ、菜の花や月は東に日は西に

ウ、いくたびも雪の深さを尋ねけり

エ、夏草や兵どもが夢の跡

問三、傍線 「此物ばかり初せみといはるゝこそ大きな手がらなれ」に込められた作者の考えとして、最も適当なものを、ア〜エから選ちなさい。

ア、蝉は、朧月夜の風のない時にはすばらしい声で鳴くので、「初せみ」は季語としてふさわしい。

イ、夏の晴れ間には、蝉の声は全く聞こえないので、「初せみ」は季語としてはふさわしくない。

ウ、夏の晴れ間に初めて聞く蝉の声は大変すばらしいので、「初せみ」は季語としてふさわしい。

エ、蝉は、人々の気分を悪くするほど激しく鳴くので、「初せみ」は季語としてはふさわしくない。

(北海道)

「解答」

問一 ア

問二 エ

問三 ウ

【】(時めける藩医師の)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(江戸時代中期、町医者の中には、駕籠かごに乗り、大勢おほしきの供の者を連れて、町中を駆け抜けて通ることを許された者もいた。)

時めける藩医師の駕籠かごに乗りて行く。供の者どもみな汗に成なりて走り行く有りさま、いつも同じやうなり。常に、俄いきなりなる病人もあるまじ。走り行かでもあらんに走らすは、名聞なもんなるべし(名譽なごころをひけらかしている)。かかる医師は、かならず貧家ひんけへはまねけども行かざるが多し。医は仁を以て元とする(他人への思いやりに基づいて行うものだ)とやらんいふに、かくの如きは(A)を以て元とすると見えたり。又貧なる医師の、たまたま病人有りと呼びに来れば、嬉うれしげに其その使つかより早く出行く。是まも又不仁とやはいふべし(思いやりに欠けるといつへきだる)。

(『勞四狂』による)

問一、部「やうなり」の読み方を、現代かなづかいで書きなさい。

問二、部「俄なる病人」とはどういう意味ですか。現代語で書きなさい。

問三、部「名聞なるべし」とあるが、ここで筆者が批判しているのはどのようなことですか。次のア、エの中から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、必要がないのに、お供の人たちを連れて行くこと。

イ、自分だけが駕籠かごに乗り、お供の人たちを走らせること。

ウ、必要がないのに、駕籠かごとお供の人たちを走らせること。

エ、必要なときに、駕籠かごとお供の人たちを走らせないこと。

問四、本文の(A)に入る最も適切な語を、次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、偽 イ、利 ウ、知 エ、孝

問五、部で、筆者が「不仁」と批判しているのは、「貧なる医師」のどのような様子ですか。現代語で、簡潔に書きなさい。

(山形県)

「解答」

問一 ようなり

問二 急な病人

問三 ウ

問四 イ

問五 病人のいる家に、いかにもうれしそうに出かけていく様子

【】(ある川のほとりに)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある川のほとりに、蟻、遊ぶことありけり。にはかに(突然)水かさ増さりきて、かの蟻をさそひ流る(巻き込んで流れる)。浮きぬ沈みぬするところ、鳩、こずゑよりこれを見て、「あはれなるありさまかな(気の毒な様子だなあ)。」と、「こずゑをちと食ひ切つて、川中に落しければ、蟻、これに乗つて渚(つら)に上がりぬ。

かかりけるところに(う)つしたところ、ある人、竿の先にとりもちをつけて、かの鳩をささんとす(とら)つとする。蟻、心に思ひやう、「ただ今の恩を送らんものを恩を返したいものよ。」と思ひ、かの人の足にしかかとA食ひつきければ、おびえあがつて、竿をかし(こ)に(そ)に(に)B投げ捨てけり。そのものの色や知るその人にそのいきさつがわかるつか。しかるに(しかし)、鳩、これをさとりて(理解して)、(い)つ(く)ともなく(と)に(入)ともなく(飛)び去りぬ。

(「伊曾保物語」より)

(注)とりもち…小鳥などを捕らえるのに用いる、ねばねばしたのり状のもの。

問一、「思ひやう」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書きなさい。

問二、「あはれなるありさまかな。」とあるが、鳩は、何のどのような様子を気の毒だと思ったのか、説明しなさい。

問三、「A食ひつきければ」「B投げ捨てけり」について、それぞれの主語の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中

から一つ選びなさい。

Aの主語      Bの主語

ア、かの人      かの人

イ、かの人      鳩

ウ、鳩      かの人

エ、蟻      鳩

オ、蟻      かの人

問四、「これ」の指し示す内容を三十字以内で書きなさい。

- 問五、本文から読み取れることとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。
- ア、他から親切にされると、その行いに報いたいという思いをもつようになるものである。
- イ、他から何度も手厚い親切を受けていると、感謝の気持ちを忘れがちになるものである。
- ウ、他への親切心をもち続けていると、周囲から大きな信頼を得ることができるようになるものである。
- エ、他への親切心を大切にす友人をもつと、自分も常に親切でありたいと願うものである。
- オ、他から思いがけず親切にされると、その喜びを誰かに話さないではいられないものである。

(福島県)

「解答」

- 問一 おもつよう
- 問二 蟻の、浮いたり沈んだりしながら川を流されていく様子
- 問三 オ
- 問四 蟻が自分に恩返しをしようとして、ある人の足に食いついたこと。
- 問五 ア

【田舎からとまり客があるに】

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

田舎からとまり客があるに、居風呂をたてて沸かしていられしに、此客風呂に入りて半時ばかり一時間ほど音も沙汰もなし(反応もない)。亭主きつかひに思へど心配に「はやく上がられよ」ともいひにくく、湯殿の口にあらずみて浴室の入り口を歩き回つて、「ゆるりとお入りなされ」といへば返事するをきく、まじ落ちて着きて居るに「一応安心していろ」と待てど暮らせど音もなし。又も不審に思ひ、又々、「ゆるりとお入りなされ」といへば返事のことあり。やゝ久しくして、海老のこくとくゆでたえびのよつに赤くなりて風呂より上がる。つれの客が見て「いかう長湯を召させられた大変長湯をなされました」といへば、「ハテ御馳走もてなしではあらうが、湯を強いられるもせつないもんだ(風呂を強制されるのもつらいものです)」。 「

居風呂＝大きな桶にかまどを取り付けた自家風呂。

太田南畝「鯛の味噌津」

問一、「思へ」の読み方を現代かなづかいに直して、全部ひらがなで書きなさい。

問二、文章中には、亭主が思っているとも言えなかつた会話文がある。それを十字以内で抜き出して書きなさい。

問三、文章の内容に合っているものを、次の1～4の中から一つ選んで、その番号を書きなさい。

- 1、田舎からの客は、亭主にくり返すすめられるまま、気持ちよく長湯をしてしまった。
- 2、田舎からの客は、亭主の言葉をそのまま受け取り、我慢して長湯をしていた。
- 3、田舎からの客は、入浴中に気分が悪くなり、しばらく、風呂から出られなかった。
- 4、田舎からの客は、風呂の湯がぬるかったので、ほどよい温度になるまで入っていた。

(茨城県)

「解答」

問一 おもえ

問二 はやく上がられる

問三 2

【】(ある時友人来りて)

次の文章は、ある絵の達人の話である。あとの問いに答えなさい。

ある時友人来りて物語のついでに印の押所おしどころを問ひしに、答へていふ。「印はその押しどころ定まれるものにあらず。その絵が出来れば、ここに押ししてくれよと絵のかたから待つものなり」といへり。ある人これを聞きて、「よろづの道Aこれにおなじ、たとへば座敷座敷もその客の居やうによりて上中下の居りどころが出来、また人のあいさつもその時々(B)にあり。臨機応変とも時のよろしきにしたがふともいへることく、C一定の相はなきもの。しかしその時のもやうの見わからぬ人にはこの段さとしがたし。能くわかる人はよくその場をしるなれば、琴柱ことばしらに譲ゆづせずとも」といへり。

(太田南畝「仮名世説」)

(注1) 印筆者がだれであるかを示す印。

(注2) 琴柱に膠す…物事に「こだわって融通のきかない」と。

問一、文章中のAこれの説明として最も適当なものを、次のア、エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア、絵のできがよいと印など押さなくてもすばらしい。

イ、絵によつて印を押すところが異なったりはしない。

ウ、絵のできばえによつて印を押すかどうか判断する。

エ、絵ができあがつて自然と印を押すところは決まる。

問二、文章中に、まるで「絵」が語るよつに表現している箇所がある。その箇所を十字以内で抜き出して書きなさい。

問三、文章中の(B)に入ることはとして最も適当なものを、(B)よりあとの文章中からひらがな三字で抜き出し書きなさい。

問四、文章中のC一定の相とはどういうことか。次のア、エのうちから最も適当なものを一つ選び、その符号を書きなさい。

ア、決まった方法や形式

イ、不変の芸術性や価値

ウ、定まった時間や場所

エ、動かない姿勢や表情

問五、この話の中心を「臨機応変」ということばを用いてまとめるとどうなるか。次の文の( )に入ることを、「臨機応変」の四字を含めて十字以上、十五字以内で書きなさい。

( )が大切だ。

(千葉県)

「解答」

問一、エ

問二、 $\frac{1}{2}$ に押しつけてねえ

問三、もやう

問四、ア

問五、臨機応変に対処する事

【】(盤珪禪師)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

盤珪禪師、播磨にて結制のとき、僧徒数百人來り集まりたりしに、その中に賊僧ありて、誰も銀子(お金)を失ひし、何がし誰それも衣服を盗まれしなど、毎日紛失ものありて、人々疑ひあひて難儀に及びしが、後には賊をなせる僧、大抵に知れければ(おおかたわかったので)、衆僧一統に(皆で)禪師に申して賊僧を追放せんと願ひけるに、(聞き届けてそのままに捨ておかれしかば、数日の後、衆僧またこのことを禪師に訴ふ。禪師なほそのままにさしおかれし。かくのときのこと三、四度に及びて、なほそのままになりければ 衆僧大いに腹を立て、「もし賊僧を追ひ払ふことならずば衆僧一人も残らず退散すべし。」と言ひしに、禪師笑ひて、「退散したくば、勝手たるべし。悟道善行の(私の道を悟り善い行いをする)僧は教ふるに及ばず。この結制もさやうなる悪心の者を教へたとさんためなれば、悪僧なればとてみだりに追放すべからず。」と言はれしにぞ、衆僧大きに感服しぬ。かの賊僧もこれを伝へ聞きて深く感悟(感動)し、座中に出でて賊せしことどもを自ら(みづか)さんげして(自分の罪を告白して)前非をあらため、德行堅固(道徳にかなった行い)をしようという意志の強い(の)僧となりしとぞ。

(注)盤珪禪師：臨濟宗の高僧

播磨：現在の兵庫県南西部

結制：僧が夏の三か月の間、外出を禁じて座禅や修行を行うこと

問一、本文中の( )に入れる人物として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1、禪師
- 2、衆僧
- 3、賊僧
- 4、悪僧

問二、傍線「衆僧大いに腹を立て」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1、衆僧が何度賊僧の盗んでいるところを目撃しても、禪師は決して追放しようとしなかったから。
- 2、衆僧がものがなくなると何度申し出ても、禪師は笑うばかりで話を聞こうとしなかったから。
- 3、衆僧が何度賊僧を追放しても、かわいそうに思った禪師がそのたびに連れ戻してしまつたから。
- 4、衆僧が賊僧を追放するよう何度訴えても、禪師は話を聞くだけで何もしてはくれなかったから。

問三、傍線「退散したくば、勝手たるべし。」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1、出て行かないなら、こちらが出て行く。
- 2、追い出したいのなら、好きにするがよい。
- 3、追いつかないなら、こちらが出て行く。
- 4、出て行きたいのなら、好きにするがよい。

問四、傍線「衆僧大きに感服しぬ。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1、禅師が、善い行いをする僧が増えていけば、悪心の者は自然にこの結制から退散していくはずであると考えていたから。
- 2、禅師が、賊僧を追放してしまうのではなく、その悪心を改めるよう導くことにこの結制の意味があると考えていたから。
- 3、禅師が、衆僧の中にまざれてしまっている悪心の僧を見つけ出すことこそが、この結制の目的であると考えていたから。
- 4、禅師が、一人残らず衆僧が退散してしまったとしても、自分だけは最後までこの結制に残っていようと考えていたから。

問五、本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1、衆僧の度重なる訴えに反省した賊僧は、結制にとどまることはできないと考え、自分の意志でその場から去ろうと決心した。
- 2、衆僧の報告を聞いた禅師は、何としても賊僧を追い払い、道徳心の厚い衆僧を一人も失いたくはないと考えるようになった。
- 3、禅師の言葉に心を動かされた賊僧は、皆の前で自分のそれまでの罪を告白して過ちを改め、善い行いを心がける僧となった。
- 4、禅師の教えに触れた衆僧は、一方的に賊僧を追い払おうとしたことを反省して、賊僧の言いぶんも聞いてみようと相談した。

(神奈川県)

「解答」

問一 1

問二 4

問三 4

問四 2

問五 3

【】(人は良き友にあはむことを)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある人のいはく、「人は良き友にあはむことを こひねがふべきなり」。

麻の中の蓬は(麻の中に生い育つ蓬は、ためざるに(力を加えなくとも)、おのづから 直しまっすぐ伸びる)といふたとひあり。蓬は枝さし(伸び方は、直からぬ草なれども、麻に生ひまじりたれば、ゆがみてゆくべき道のなき(曲がって伸びていく場所がない)ままた、心ならず(不本意ながら)、うるはしくきちんとまっすぐに) 生ひのぼるなり。

心の悪しき人心のねじけた人なれども、うるはしくうちある人(正しく立派に過している人の中に交はりぬれば、さすが(そうはいっても、やはり) かれこれをはばかるほどに(あれこれと気づかうことが多くなり)、おのづから直しくなるなり。

(「十訓抄」による。)

問一、 こひねがふべきなりとありますが、この部分を「現代かなづかい」に直し、ひらがなで書きなさい。

問二、 おのづから とありますが、この部分の意味として最も適当なものはどれですか。次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア、自然と    イ、高々と    ウ、しっかりと    エ、ゆっくりと

問三、本文の内容と合うものはどれですか。次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア、麻が蓬の中でまっすぐ育つたとえのように、心のねじけた人は周囲に気づかうことはない。

イ、麻が蓬の中でまっすぐ育つたとえのように、正しく立派に過している人は良い友となる。

ウ、蓬が麻の中でまっすぐ育つたとえのように、心のねじけた人は良い友と出会つことはない。

エ、蓬が麻の中でまっすぐ育つたとえのように、良い友と出会つことにより人は正しくなる。

「解答」

問一 こいねがうへきなり

問二 ア

問三 エ

【】(奉公人のはてと覚しきが)

次の文章は、江戸時代に書かれた笑話集の中の一編である。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

奉公人のはてと覚しきが(以前、武家の家臣であったと思われる者が)宿を借り、四方山のこと(いろいろなこと)を語り尽くしけり。亭(亭主が)ほめて、「いかさまなるほど」、ただの人(普通の人)とは見え候はず。もはや休み給へ。夜着を参らせんや(ふとんをお持ちしましょうか)。「と」ア言ふ。「いや、いかほどの(たくさんの)野陣山陣をしつけ(野や山での戦いをし慣れていて)、少々(少々)のことなら(寒き)ことをば知らず。無用。」と言つて、着のままイ(寝)ねけるが、夜ふくるに従ひ、ひたもの(ひどく)寒し。

時に、「亭主、亭主。これの(この)家の(ね)ずみには、足を洗はせたか。」とウ(問)ふ。「いや、むしろの(む)しろはなつ。」と(H)答ふ。

「それならば、むしろを「一枚着せられよ」掛けてください。ねずみが、着た物を踏まば(私の着ている物を踏んだら)、むさからず(不潔である)から)。」と。

(安楽庵策伝「醒睡笑」による。)

(注) むしろ わらなどを編んで作った敷物。

問一、傍線部むしろを、現代かなづかいで書きなさい。

問二、傍線部ア、エの中から、「奉公人のはてと覚しき」者の言動を表すものをすべて選び、記号で答えなさい。

問三、傍線部 では、何が「無用」なのか。「無用」であるものを、本文中の語を抜き出して答えなさい。

問四、「奉公人のはてと覚しき」者が、傍線部 のように言ったのはなぜか。言い訳のために亭主に言った理由と、本当の理由を、それぞれ書きなさい。

(静岡県)

「解答」

問一 さきょう

問二 イ・ウ

問三 夜着

問四 (亭主に言った理由)ねずみが、私の着ている物を踏んだら不潔だから

(本当の理由)ひどく寒いから

【1】(卯月の中)る)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

卯月(旧暦の四月)の中にる、須磨の浦一見す。うしろの山は青はにじむはしく、月はいまだおぼるに、はるの名残もおはれながら、ただ此浦のまことは秋をむねとするにち(ち)からたるつかく、心にもものたらぬけしきあれは、

ばせを

夏はあれど 留守のやつ世須磨の月

(注) 須磨の浦 現在の神戸市須磨区内の海辺。風景の美しさで有名。月の名所。

まこと: 真の趣。本質。 むね: 主となるもの。中心。

ばせを: 松尾芭蕉の「よ」。

問一、次のうち、本文において、作者が「須磨の浦」を訪れたときの季節として最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を書きなさい。

ア、早春 イ、晩春 ウ、初夏 エ、晩夏

問二、青はにじむはしくの意味として最も適しているものを次から一つ選び、記号を書きなさい。

ア、青葉が茂って美しく

イ、木の葉が風にそよぎ

ウ、青葉のころが想像され

エ、木の葉がぬれて青々とし

問三、留守のやつ世について

(1) 「これを現代かなづかいになおして、すべてひらがなで書きなさい。

(2) 「これは、「」のときの作者のどのような心情を表したのか。作者がそのような心情になった理由にもふれて説明しなさい。

(大阪府)

「解答」

問一 ウ

問二 ア

問三 (1) るすのよじなり

(2) いま眺めている須磨の浦の風景が真の趣がある秋の風景でないことからくるもの足りなく思っている心情

【】(ある尼公)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

出家しないで仏道修行をする尼は、「尼女房」(あまによつばう)と呼ばれていた。次は、そういう尼の一人が、主人とともに、それぞれ馬に乗って、出かけたときの話である。

ある尼公、坂東の習(関東地方の習慣で)、尼女房も、馬にのるもあることにて、この尼公、主のさきに打ちけるを、要事ありて、「その馬留めよ。」と云えは、鞭をつよく打ちけり。さて馬はやく進む。又「留めよ。」と云ふたびに、つよく打つが、それして(目的の方向から外れて)遠く行き延びぬ。遠が行きて、追ひつきぬ。「いかに馬留めぬ。」と云えは、はやく行くぞとつしてはやく行くのかと云はれて、「この馬がものに心得候はで)もの道理を知らないものですから、とまれと打てば、はやく行き行き候ふ。」と云ひけり。我がものに心得ずして、馬の咎(非難されるべきこと)と思ひける。

人ごとの習にて我が身の非をばおぼえず、常の人は馬には荷をこそおはする(背負わせる)に、この尼は咎をおはせけるにこそ。

(『沙石集』(の)

問一、部「思ひける」の読み方を、現代かなづかいで書きなさい。なお、漢字の読み方も書くこと。

問二、部の中から、その主語にあたる人物が「尼公」であるものをすべて選び、番号で答えなさい。

問三、部1「いかに馬留めぬ。」を現代語に直したとき、最も適切なものを、次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、どうして馬を止めてしまったのか。

イ、どうやって馬を止めたのか。

ウ、どうして馬を止めないのか。

エ、どうしたら馬を止めることができるのか。

問四、次は、部2「馬の咎」について、その内容を具体的に説明したものです。本文に即して、( )に入る適切な言葉を、それぞれ現代語で書きなさい。

( ) と思って鞭打つても、そのたびに馬が( ) ということ。

問五、本文の話を通して、筆者が伝えようとしたこととして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、自分が間違っていない場合でも、他人に非難されたときは自分のことを反省してみるべきであるということ。

イ、人は、自分の間違いには気がつかないで、ほかのものを非難してしまいがちであるということ。

ウ、人間であれ、ほかの動物であれ、ものの道理をわきまえているものとそうでないものがあるということ。

エ、ものの道理がわかる分だけ、人間はほかの動物よりも尊いのだということ。

(山形県)

「解答」

問一 おもいける

問二 、

問三 ウ

問四 馬を止めよう 速く進んだ

問五 イ

【】(今はむかし、物ごと自慢くそきは)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今はむかし、物ごと自慢くそきはとんなことでもやたらに自慢したがるのは未練(未熟)のAゆゑなり。物の上手の上からは道の名人である以上は、すこしも自慢はせぬ事なり。我より手上的者(技量の優れている者)とも、広き天下にいかほどもあるなり。諸芸Bばかりに限らず、武道(武士道)にも武辺(武芸)・口上(弁舌)以下、さうした(ま)ったく自慢はならぬものを、今の世は賤(下)身分の高い者、低い者それぞれに自慢して声高(荒言)暴言(はきち)らし、わがままをする者多し。その癖(お)のれがきずをかくさんとして、よき者をそしり笑ふ事あり

( 『仮名草子集』 二〇九頁 )

問一、文中Aの「ゆゑ」の読み方を現代仮名遣いで書きなさい。

問二、文中Bの「ばかり」と同じ意味で使われているものを、次のア～エから選びなさい。

ア、我ばかりかく思ふにや(このように思つのだらうか)。( 『徒然草』 )

イ、二十一日卯の時(午前六時)ばかりに舟いだす(こぎ出す)。( 『土佐日記』 )

ウ、三寸ばかりなる人いとつつくしうてゐたり。( 『竹取物語』 )

エ、五月ばかりなどに山里にありく(を歩き回るのは)、いとをかし。( 『枕草子』 )

問三、文中「物の上手の上からは、すこしも自慢はせぬ事なり」とありますが、その理由を筆者はどのように述べていますか、現代語で書きなさい。

問四、本文の内容に合っているものを、次のア～エから選びなさい。

ア、自分のけがや病氣のことを隠そうとして、元気な素振りをしてみせる者が年々増えてきたということ。

イ、武士道の精神を理解する者が増えてきたので、どんなことでも自慢したがるという未熟者は減ったということ。

ウ、身分が高い人ほど、他人のことを考えずに自分の手柄だけを取り上げて得意そうに自慢する者が多いということ。

エ、得意顔で自慢話を口にして勝手な振る舞いをし、自分の欠点を隠そうとして立派な人のことをけなす者が多いということ。

(群馬県)

「解答」

問一 ゆえ

問二 ア

問三 自分より技量の優れている者が広い世の中にはたくさんいるから。

問四 エ

【】(「この世に、いかでかかるとありけむ)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい

「この世に、いかでかかかるとありけむ」としてこんなことがあったのだらう」と、めでたくおぼゆることは、文こそはべれな(手紙です)。『枕草子』に返す返す申しては入るめれば、「と新しく申すに及ばねど」今さら改めて申すまでもないですが、(なほ)やはり、「いとめでたきものなり。はるかなる世界にかき離れて(はるか遠くの土地に離れ住んで)、幾年あひ見ぬ人なれど、文といふものだに見つれば)手紙というものさえ見ると)、ただ今さしむかひたる心地して、なかなか(かえって)、うちむかひては思ふほども続けやらぬ(直接面とむかつては思っているほどの)ことも言ひ続けられない(心の色もあらはし、言はまほしき)ことを(言いたい)ことも(「まじまじ書き尽くしたるを見る心地は、めいじししくうれしく、あひむかひたるに劣りてやはある)決して劣ってはいません)。

(『無名草紙』による。) 言いたいこと

問一、さしむかひたるとありますが、「この部分を」現代かなづかい「に直し、ひらがなで書きなさい。

問二、本文中に、「『枕草子』に返す返す申しては入るめれば」とありますが、「これはどのようなことを」『枕草子』の作者が述べているということですか。次のア、エの中から最も適当なものを二つ選び、その記号を書きなさい。

ア、手紙のすばらしさ　イ、手紙の楽しさ　ウ、手紙の大切さ　エ、手紙の便利さ

問三、次は、本文の内容をまとめたものです。空欄にあてはまるものを、次のア、エの中から二つ選び、その記号を書きなさい。

手紙は、何年も会っていない人であっても、直接会っているような気持ちにさせたり、面とむかつて言ひ続けられない心のうちも言ひ表してくれたりする。そして、手紙の中に、言いたいことも(まじまじ書き尽くしてあるのを見る気持ちは) )。

ア、直接会つよりはるかにまざっている

イ、直接会つのは決して及ばない

ウ、直接会つのに決して引けをとらない

エ、直接会つのはとても比較できない

(埼玉県)

「解答」

問一 さしむかいたる

問二 ア

問三 ウ

【】(ある池の中に)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ある池の中に、蛇と亀、蛙と知首にて住みけり。日照りして、池の水も失せ、食物も無くして、飢えんとしける時、つれづれなれば、蛇、亀をもて使者として、蛙のもとへ、時のほどおはしませ。見参せん。(ちよっとおいでください。お目にかかりたい。)  
「と言ふに、蛙、返事に申しけるは、「飢渴にせめらるれば、仁義守るべき道徳を忘れて食をのみ思ふ。情けもよしみも情けをかけるのも親しくつき合つのも世の常の時こそあれ。かかるにかなれば、えまゐらじ(おつかがいできません)。「と返事しける。  
「ぼんぼん(ト)あぶなき見参(訪問)なり。」

(「沙石集」の文章による)

問一、傍線の部分の意味として最も適当なものを次のうちから選んで、記号で答えよ。

ア、親友　イ、隣近所　ウ、知恵のあるもの　エ、音楽好きなもの

問二、傍線の部分に使われている「つれづれなり」の意味として最も適当なものを次のうちから選んで、記号で答えよ。

ア、たいへん仲がよい　イ、何もすることがない　ウ、何となく落ち着かない　エ、とてもなつかしい

問三、傍線の部分を現代仮名遣いに直して書け。

問四、傍線の部分は、(1)誰が、(2)誰に、「見参せん」なのか。次のうちからそれぞれ選んで、記号で答えよ。

ア、蛇　イ、亀　ウ、蛙

問五、傍線の部分の内容を具体的に述べている部分を文章の中から探し、そのはじめの五字を書け。

問六、傍線の部分でなぜ「あぶなき」というのか、簡潔に書け。

(福井県)

「解答」

問一 ア

問二 イ

問三 おわしませ

問四 (1)ア (2)ウ

問五 日照りして

問六 訪問すると食べられてしまうから

【漢文】

【】(楚人に盾と矛とをひさぐ者あり)

次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

楚人(楚の国の人)に盾と矛とをひさぐ(売る)者あり。これを褒めていはく(自慢して言つて)は、

「我が盾の堅きこと(堅いこと)と、よく陥す(突き通す)ものなきなり。」と。また、その矛を褒めていはく、「我が矛の利なること(鋭いこと)、物において 陥さざる(と)なきなり。」と。ある人いはく、「子の矛をもって、子の盾を陥さば何如(どう)なるか。」と。その人答ふる(と)あたはざる(なり)できなかつた。

(「韓非子」「よじ

問一、これとは、何を指しますか。次のア、エから適切なものを一つ選び、その符号を書きなさい。

ア、楚 イ、人 ウ、盾 エ、矛

問二、いはくを現代仮名遣いに直しなさい。

問三、陥さざる(と)なきなり(の意味として、適切なものを次のア、エから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア、突き通すことができるものはない

イ、突き通さないものはない

ウ、突き通すとはかざらない

エ、突き通すことができるかどうか分からない

問四、子は、どのような人を指すか、本文中から抜き出しなさい。

問五、子の盾を陥さば何如は、漢文では「陥子之盾何如」と書いてあります。この漢文に返り点を付けなさい。

問六、この故事からできた「矛盾」という言葉の意味を書きなさい。

(石川県)

「解答」

問一 ウ

問二 いわく

問三 イ

問四 楯と矛をひさぐ者

問五 陷子之盾何如

問六 話のつじつまがあわないこと

【】(子曰く、三人行けば)

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

(書き下し文)

子曰く、三人行けば、必ず( )。其の善なる者を選びて之に従ひ、其の不善なる者にして之を改む。

(漢文)

子曰く、三人行けば、必ず有り我が師焉。擇其善ナル者而従之、其不善ナル者ニシテ而改之。

(解釈)

孔子言う、三人の人が同じ道を行けば、必ずその中に自分の師とすべきものがある。自分のほかの二人の中の、善なる者をえらんで、それを見倣うようにし、不善なる者にかんがみて、自分の不善を改めるようにする。かくすれば、そこに師はきつと得られるものだ。

(「論語」による)

(注) 〳にかんがみて 〳〳では「〳〳と自分を比べて」の意

かくすれば 〳〳すれば

問一、( )に当てはまる、傍線「有我が師焉」の書き下し文は、どのように読みますか。その読みを、全部ひらがなで書きなさい。ただし、「焉」は、〳〳では読みません。

問二、傍線「之を改む」とありますが、何を改めるのですか。(解釈)の中から、五字で書き抜きなさい。

問三、この文章を学習して、F君は次のように感想を書きました。( )に当てはまる最も適当なことを、(解釈)の中から、十字で書き抜きなさい。

この文章では、善なる者にも、不善なる者にも、必ず「( )」があると書いています。つまり、〳〳では、どんな人からでも学ぶことがあるということを言おうとしているのではないのでしょうか。このことは、現代の私たちの生活にも通じると思います。

(北海道)

「解答」

問一 わがしあり

問二 自分の不善

問三 自分の師とすべきもの

【】(蘇秦曰はく)

次の漢文とその書き下し文を読んで、後の問いに答えなさい。

〔漢文〕

蘇秦曰ハク、臣聞ク古之善ク制<sup>レ</sup>スル事ヲ者ハ、転<sup>シ</sup>テ禍<sup>ニ</sup>ヒラ<sup>シ</sup>テ為<sup>レ</sup>シ福ト、因<sup>リ</sup>テ敗<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>スト功ト。

〔書き下し文〕

蘇秦曰はく、「臣聞く、古の善く事を制する者は、( )、( )、敗に因りて功と為す。」と。

〔現代語訳〕

蘇秦は言う、「わたしは、『昔の、うまく世の中を治める者は、災いを切り替えて福とし、失敗をもとに成功に導くようにする。』ということを聞いています。』と。」

一 司馬遷「史記」より一

問一、制<sup>スル</sup>事<sup>ヲ</sup>の「制する」と異なる意味で「制」が用いられているものを次の1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1、制作
- 2、制御
- 3、自制
- 4、抑制

問二、書き下し文の( )に、適切な語句を書きなさい。

問三、この文章で、「蘇秦」は、災いに遭ったり失敗したときどうすればよいと考えているか。最も適切なものを次の1～4の中から

一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1、むやみに騒がず、落ち着いて迅速に行動する方がよい。
- 2、たくみに処理して、幸福や成功のきっかけにする方がよい。
- 3、幸福や成功が訪れるまで、じっと我慢する方がよい。
- 4、被害の広がりを防ぎ、立て直しを最優先する方がよい。

(青森県)

〔解答〕

問一 1

問二 禍ひを転じて福と為し

問三 2

【】(晋の明帝数歳にして)

次の漢文(書き下し文)と現代語訳とを読んで、あとの問いに答えよ。なお設問の都合上、現代語訳の一部は空欄として示した。

〔漢文(書き下し文)〕

晋の明帝数歳にして、元帝の膝上に座せしとき、人あり長安よりきたる。元帝、洛下の消息を問ひて、熾然として涙を流す。明帝問ふ、「何をもつて泣くを致せる」と。つぶさに東渡の意をもつてこれに告ぐ。よひて明帝に問ふ、「なんぢが意におもへらく長安は日の遠きにいかん。」と。答へて曰く、「日」。人の日辺よりきたるを聞かず。居然として知るべし。」と。元帝、これを異とす。明日群臣を集めて宴会し、告ぐるに「この意をもつて、さむに重ねてこれを問ふ。すなはち答へて曰はく、「日」と。」と。元帝、色を失ひて曰く、「なんぢ、何の故に昨日の言に異なるや。」と。答へて曰くはく、「目を撃ぐれば日を見るも、長安を見ず。」と。

(注) 晋 中国の国号。

明帝・元帝 いずれも晋の国の君主。

〔現代語訳〕

晋の明帝が数歳の時、父の元帝の膝に座っていると、長安から人がやって来た。元帝は、旧都である洛陽の様子をたずねて、はらと涙を流した。息子の明帝が、「どうして泣くのですか。」とたずねた。晋が戦いに敗れて東にある江南の地に渡ってこなければならなかったときの気持ちを詳しく話した。そして明帝に、「おまえの考えでは、長安とお日さまとどちらが遠いと思つかね。」とたずねた。答えて、「お日さまの方が」。お日さまのあたりから人が来たことは聞いたことがありません。あたりまえのことです。「と言った。元帝は、( )。翌日群臣を集めて宴会し、このことを披露し、重ねてもう一度同じことをたずねた。すると答えて、「お日さまの方が」( )。「と言った。元帝は」( )、「おまえ、どうして昨日の言葉と違つのか。」と言った。答えて、「目をあげたらお日さまは見えますが、長安は見えません。」と言った。



「解答」

問一  
イ

問二  
ウ

問三  
ア

問四  
エ